71
232

物論

荻生徂徠著

成明館藏

人物論

目次

孔子論
氣質對禮……一
大學の道對教育勅語……七
修學時代對其實力……十五
政治時代對人情……十八
天道時代對自由自在……二十五
横井小楠……三十四
大塩平八郎……八十三
大塩中齊の學を論す……九十二

十九世紀の豫言者　二
フレデリック、ロベルトソン……百七

孔子論

松村介石著

氣質對禮

吾人が孔子傳につき、劈頭に聞くところの、彼れが兒たるとき、嬉戯する、常に俎豆を陳ね禮容を設けたりと云ふ。是れなり。諺に曰く三歳の兒、百歳に及ぶと。實に孔子は禮容の人たりし。曰く、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動と。是れ孔子が顏回に告げたる語也。子貢告朔の餼羊を去らんと欲す。子曰く賜也爾は其羊を愛す、我は其禮を愛すと。是れ即ち孔子が禮を以て子貢を戒しめたるの語なり。曰く君に事ふるに禮を盡す、人以て諂ふとなすと。是れ孔子が諂ふに似た

る法と、其君より禮を盡したる者あればなり。原壤夷して俟つ杖を以て其脛を叩きたりと云ふ。是れ温良恭儉讓の君子すら猶且以て其非禮を忍ぶと能はず、大に憤りを發したるより由るならん。又聞く孔子大廟に入て事毎に問ふ、或人曰く誰れか鄹人の子を禮を知れりと云ふ、大廟に入て事毎に問ふより非ずやと、孔子之を聞て答て曰く是れ禮なりと。嗟呼吾人はこゝに至りて乃ち一考を要すべき問題に會す。夫れ孔子は天性禮儀の人なり、而して禮を以て人を匡し、禮を以て天下を治めんと欲したる君子なり。以之其の或は僞善に類するが如き行爲あるも、敢て尤むべきにあらずと雖ども、今其れ其人にあらざるして、而して徒らに禮儀のみを重んぜば、其弊や畢に僞文虛式に陷らずんばあらず。惟んみれば大廟に入て事毎に問ふに及ばざるなり、何となれば孔子已に能く之を知るに非ずや。然るを宛も知らざるかの如くして之を問ふ、縱令ひ禮文の存するあるもせよ、誤てば忽ち人をして空しく形体的の虛禮者たらしむ。勿論吾人は決して禮を輕んずるものにあらず。今や社會紛亂して禮儀の道大に衰ふ。此時に當り宜しく起て禮道を講ぜざるべからず。然れども畢竟するところ、禮は末なり。誠は本なり。誠ありて敬生じ、敬ありて禮顯はる。若夫れ誠敬の心を修むることを知らずして、徒らに外形の禮を以て之に迫らば、乃ち畢に僞善者を出すに至らん、豈深く謹まざるべけんや。又論語鄉黨の篇を讀むに左の語あり、曰く席不正不坐、割不正不食と、又曰く孔子鄉黨に於て恂々如たり、下大夫と言ふ侃々如たり、上大夫と言

ふ間々如たり、公門ニ入る鞠躬如たり、出でゝ一等を降る顔色を逞て怡々如たりと云々、是れ皆其形躰儀式を云べるなり。蓋し孔子ハ誠意の人たりし。此故ニ僞善に陥るとなかりし、然れども若夫れ孔子を學ぶものゝして、徒ニかゝる外形に着眼するときハ、黒烏白粉を塗て直ニ白鷺に擬するが如き醜体あるを見ん。此故ニ余輩ハ常ニ曰く凡そ聖賢を學ばんと欲するものハ、決して見ゆる氣質幷ニ其の外形を學ぶべからず、宜しく先づ其の見へざる心靈情意のあるところを學ぶべきなり、温良恭儉讓の君子ハ到底、磊落豪魁、手乾坤を斡すの英雄たると能ハざるなり、只だそれ氣質は天賦のまゝなるを要す。是れ教育家が尤も心得おかざるべからざる要點なり、而して人傑を學ぶ青年が尤も注意せざるべからざる嶮處とす。微子は之を去り、箕子ハ之が奴となり、比干は諫て死し、柳下惠ハ汚君を耻ぢず、伯夷叔齊ハ首陽山ニ隱る、其性行の同じからざる、實ニ天壤も啻ならざるなり、而かも皆以て聖賢の徒たるを失なハず。マホメットハカライルが所謂る青筋を額上ニ張り、意氣顔面ニ溢るゝ將軍なり、ソクラテスハ聰明睿達眞摯慈心の教師なり、釋伽牟尼ハ憂想深思の後脱然頓悟し來りて、爰ニ三世の世界を看破したりと唱へ出でたる有情的の哲學者なり。而て今此孔子は禮儀三百位儀三千の間ニ往來して、或ハ温然、或ハ厲然、或ハ便々、或ハ與々、其幼年ハ學ニ志し、其中年ハ政治ニ熟し、其晩年は知命樂天の境ニ入りたる聖人なり。然れども記憶せよ、一貫の氣質ハ竟ニ俎豆を練ね禮容を設けたる兒心を脱却する

と能いざりしとを。

然則吾人聖傑を學ぶところのもの、決して其氣質を學ぶべからず、又其業跡を學ぶべからず。學ぶべきは聖心傑意のところ在り。子路は勇猛の性なり、子貢は敏達の資なり。顏回は篤行の人なり、而かも皆もつて孔子の弟子たるを失はず、猶かのペテロ、ヨハネ、ヤコブの徒が、各々其性情を異にしたるに拘らず、齊しく基督の徒たりしが如し。今夫れ余輩が畏々として此義を辯ずるゆゑんのものは、蓋し今日人豪の傳を讀んで、大に此邊に誤るもの多きを認むればなり。孔子曰く君子重からざれば、則威あらずと。之を聞けば則ち直に重々敷其身を處して以て威ある君子の人たらんと欲す。是れ即ち已に一歩を誤りたるものあり。重と云ひ威と云ふ、畢竟、積誠實意の結菓なり。然るを徒らに積誠實意の修業を忘れて、而して直ちに其の形躰を學ばんとす、是れ誤謬の源頭なり。以此百僞亂生す。然而して一歩を進めて孔子を評せば、孔子は幾分か此人造的の禮弊に陷りたる人なるが如し。是れ老莊の徒が嘲りしゆゑんなるらん。是れ儒教が往々支離決裂の弊に趣くゆゑんなるらん。是れ漢學者が往々局齬不展の人たるゆゑんなるらん、而して是れ儒者風が兎角天眞爛熳の自然を失ふに至るゆゑんなるべし。

大學の道對教育勅語

次に吾人が孔子傳によつて聞くところ、彼れが十有五にして學に志ざしたりと云ふ、是れなり。學とは何ぞ、蓋し大學を云ふなり。大學とは何を云ふ。曰く明德を明にするに在り、

民を親まずるに在り。至善まに止るまに在り。是れ之を大學の綱領とす。

古者十有五まして大學まに入るを例とす。然れども「入る」と「志す」との間まは區別あるなり。「入る」とは單に大學まに入て斯道を學ぶを云ふなり。「志す」とい眞に斯道の人たらんとを志ざすを云ふなり。王陽明歳首て十一、嘗て塾師に問ふて曰く、何をか第一等の事とおもふ。塾師答て曰く、唯だ書を讀み、登第を期するのみ。陽明疑ふて曰く登第恐らくい第一等の事まあらじ。書を讀む、聖賢を學ぶに在るべしと。父龍山公之を聞て笑ふて曰く汝聖賢たらんと欲するかと。孔子の大學まに在るや。其志、又決して名聞爵祿登第の上にはあらで、全く斯道の人たらんと欲したる上まに在りしなるべし。於此乎則曰く吾

れ十有五まして學まに志ざしたりと

今夫れ儒教を學ぶもの、漢學を學ぶもの、大學まに在るもの、書籍を繙くもの、果して皆斯志あるか。學いに以て獨立せざるべからざる、眞理いに以て曲くべからざる、政治、經濟、神學、哲學、各々皆其自身まに犯すべからざるの領分と權利と目的とを有す。爵祿の爲まに賣るべからず、武威の爲まに屈すべからざる、世俗の爲まに曲ぐべからず、登第の爲まに學ぶべきものまあらざるなり。

前條にも陳るが如く孔子いに禮を主張するの餘り、往々虛文儀式的の弊まに陷りしとなきを保せず、又其の彼を學ぶものをして大まに此處まに誤らしむるとなきを保せず然れども元來孔子いに誠意の人なり。此を以て其大學まに入るや、專ら斯道の人たらんとを志したり。是れ大まに吾人が學ばざるべから

ざる處よ在らずや

抑々明德を明よすとい何の謂ぞ。明德とあらば之を明よす

るに及ばざるなり、已よ明德なり、何ぞ更よ之を明よするの

要あらんや。然ども此よ所謂明德とい天與自然の靈性を云

ふなり、天與自然の靈性い人々各固有のものよて、陽明が所

謂る個々の人心仲尼ありと云へるもの即ち是れなり。然る

よ斯靈昭不昧の明德、往々よして私欲の爲めよ晦蒙障蔽せ

られ、而して其明光を失ふるよ至る。猶はかの雲煙が屢〻日

月を蔽ふ如きものあるを以て先づ斯雲煙を拂除せよ、日月

忽ち明を放たんとの義なり、換言せば私欲を拂て汝が固有

せる天賦の明德を明かならしめよとの意なり基督曰く吾い

わ亡ひしものを尋ねんが爲めよ世よ來れりと、又曰く吾い

迷ふたる羊を尋ねんが爲めよ來れりと、已よ失ひたると云

ひ、又迷ふたりと云ふ。即ち嘗て失われざりしもの、迷いざり

しものゝ必せり。存在せしや亡はざりしもの、迷いざりしもの、

是れ即ち神を離れざる靈魂なり。已よ神を離れて迷ひ、又神

を離れて亡われたり此故に基督い其迷ふたるもの、其亡は

れしものを尋ぬて呼び戻し、之をして再び神の許よ棲息せ

しめんとの志よて、乃ち斯世よ降りしとの義なり。然則是れ

豈明德を明よすと云ふ。大學の道と同主意よあらずや

今請ふ教育勅語よ就て之を辯せん。謹んで勅語を案ずるよ、

誠に以て間然するところなし。曰く忠曰く孝、曰く和曰く信、

曰く恭儉、曰く博愛、曰く修學、曰く習業、曰く智能を啓發すべ

し、曰く德器を成就すべし、曰く進んで公益を擴め、世務を開

き、常に國憲を重んじ、國法に遵ひ、一旦緩急あらば義勇公に奉じ、以て天壤無窮の皇運を扶翼すべしと云々。誰か之を非議するものぞ。是れ萬世の眞理なり、宇内の公道なり、古今に通じて謬らず、中外に施して悖らざるものなり。而して所謂吾人天與の明德、明かに此れが證を爲す。然れども茲に一考を要すべきは、何が故に期明德の萬古に存するあるにも係はらず、世に不忠の臣あるか、不孝の子あるか、人類悉く皆和、信、恭儉、博愛等の人たる能はざるか、前條の美德に人々古より知らざるに非ず、何が故に知て行はざるか。今日始て勅語を拜して、其德の德たるを知りたるに非ず、其の之を身に行はざるを得ざる義務責任あるとを從來より知らざるに非ず、而かも猶且つその人たらざる者多きは何ぞや、明德我に

ありと雖ども、私心之を蔽へばなり。然則如何にして此の私心を去り、如何にして斯明德を明にすべきか、是れ則ち大學の敎たるなり。而して文武、周公、孔子、子思、孟軻、朱晦奄、陽明等が大に茲に練磨修養の工夫を費やしたるところのものとす。然るを何等の論者ぞ、近來叨りに口を開て說て曰く宜しく此等の美德を書して以て禮理せしめよ、輙ち其人直に美德實行の人たらんと。何ぞ其語の簡易にして、而して其德育法の單純なるや。吁嗟若夫れ眞に然らんか、是れ基督孔子子思孟軻等を凌駕する新發明の道たるなり。而して吾人の欣喜雀躍に堪へざるなり。何となれば吾人不肖と雖ども、常に斯道の人たらんと欲し、常に斯明德を明にせんと欲し、而して日夜克己、復禮、修養、練磨の勞を積みつゝあるものなり。然

るを一點頭直に其道に進み、一屈膝直に其人たるを得るとせば、吾人は其易簡の道を得たるを喜ばざると能はざれども、其れ然り然れども吾人謹んで勅語を拜誦するに朕爾臣民と俱に拳々服膺して咸其德を一にせんことを庶幾ふとあるを見れども、未だ之れを禮拜せよ、然則汝直に其人と化せんとあるところを見る能はざるを奈何にせん。抑〻拳々服膺とは如何なる意味ぞ、咸其德を一にせんことを庶幾ふとは如何なる意味ぞ、所謂る明德を明にせんことを庶幾ひ望み志し、勵み、行はんとの意味にあらずや。然るを若夫れ徒らに形躰的に之を奉じて、而して以て我事了れりとなすものゝ如きは、則ち精神上勅語の罪人にあらずや。敢て問ふ、今日學校教師たるもの、果して如何、眞正忠孝の人たらんと欲する志を立て、德器を成就するの工夫を練りつゝあるか、其平生の品行は如何。文官たるものゝ果して如何、咸斯道の人たらんことを勉めつゝあるか、大臣たるものゝ如何、議員たるものは如何、總じて我國臣民たるものゝ果して如何、孰れも皆勅語に從ひ、拳々服膺以て其德を一にせんことを、熱心熱意に庶幾ひつゝあるか、余輩が聞んと欲するものゝ、點頭屈膝の式にあらずして實心躬行の上にありとす。嗟呼吾人の今日トマス、カライルが所謂る作工的の社會を觀て、憂國の心禁ずること能はず、起て大學の道を講せんと欲するの情に堪へざるなり。

修學時代對其實力

孔子已に大學に入り、專意一心、明德を明にせんことを欲し、克

己復禮、脩身誠意、大に其品性を養ひたり、然れども其目的とするところハ啻に一身の修養ニ止まらず、之を以て家を齊へ之を以て國を治め之を以て天下を平かニせんとを期したるなり、左れば孔子ハ又致智格物ニ心を用ひ、文を習ひ藝を學び、博聞多能の人となり、後日三千有餘人の弟子を得たる曉ニハ、即ち能く六藝の師たるを得たりしものヽ如し、時人嘗て孔子を謂ふて曰く夫子ハ聖者か何そ其れ多能なると、又曰く大哉孔子博く學んで名を爲すところなしと、又曰く夫子ハ溥博淵泉時ニ之を出すと、又孔子も自ら其覺悟を語て曰く君子ハ能なきを病む、人の己を知らざるを病まずと、以て孔子が實力（アビリチー）養成の點ニ於て、亦た大に其意を用ひたるを見るべきなり。一方ニ於てハ修身正己の上に力を用ゆ、一方ニ於てハ學識藝能の上ニ心を用ゆ。是れ今日吾人が大ニ學ばざるべからざる要點ニあらずや。今それ世上を觀察するニ文藝學術ニ心を用ゆるとおろのものハ、修身誠意の上ニ心を留めず、識あるものハ德なく、智あるものハ誠なく、才あるものハ實なく、藝あるものハ威なく、片々子々として聲聞をのみ是れ爭ふ、誠ニ以て嘆ぜざる也。左れば人として又一方を觀察すれば徒らニ腐儒禪僧の後へニ從ひ、局々たる禮文を議し、落脫虛空の言を吐き、理想高くして實際ニ暗く、今日の明代ニ處して、用ゆる所なからんとす。吾人が今日天道を說き幷せて又實力を講ず、意蓋しこゝニ在るなり

孔子を觀ニ孔子ハ實ニ聖賢の徒なり、然れども其俗事を處するに於て又決して迂濶ならざりし、曰く委吏となる料量

平かなり、曰く司職吏となる、畜蓄息すと、以て其技倆を見るべきなり、長岡の傑士河合嗣之助嘗て學を山田方谷ゝ受く、暫くありて驚て曰く先生ゝ實ゝ三井商店の番頭たるを得と、夫れ方谷ゝ儒者なり學者なり君子なり、而して尤も聖學修養ゝ其靈臺を練りたる人とす、而かも以て三井商店の番頭たるを得しと云ふ、吾人が理想とする人物ゝ凡そ斯る類を云ふなり而して孔子ゝ即ち其人たりしが如し

政治時代對人情

かくて孔子已に大學を修め、學識を蓄へ、藝能を習ひ、實力を養ひ、而して治國平天下の志あり。何が故ゝ治國平天下を欲せしか、利の爲めか名の爲めか、抑も又嬉好心ゝ驅られたるが爲めなるか、曰く否、否、志士ゝ身を殺して仁を成すと自ら云へり、又曰く憤を發して食を忘れ、樂んで以て憂を忘ると。何が故に憤るか、蓋し王道行はれず仁義地を拂ひ、世ゝ戰國と成り果て、黎民塗炭ゝ苦むの狀態を觀るゝ忍びず、乃ち世上を睨して憤慨悲慨、食だも忘るゝ計りゝ人情(ヒューマニチー)の心を摧起したるに由るなるべし、於此乎三十にして立つや、即ち其の意を誠ゝして立脚の地を定め、其實力(アビリチー)を養ふて以て自ら爲すあるゝ足ると信ぜるや、否や、忽ち政治界に奮躍し出でたり

孔子の理想ゝ世を堯舜の古ゝ復へし、王道を施し仁政を行ひ、周禮を以て天下を巨し、五倫を以て人を制し、終ゝは不知不識、帝の則ゝ順ふなる無爲の治世たらしめんとを欲せしものゝ如し、於此乎出でゝ、先づ齊の景公ゝ說て曰く政の道

たるや他なし、君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たるゝ在るのみと。齊の景公用ゆると能わず。乃ち衛の靈公に往く、衛の靈公陳を問ふ、孔子失望して答て曰く俎豆の事わ則ち嘗て之を聞く軍旅の事わ未だ之を學ばざるなりと、明日遂ゝ行る。其より陳に往て糧を絶ち從者病で能く興つものなしと云ふ、是れ史傳の傳ふるところなり

孔子わ何が故に用ゐられざりしか、其道非なりしが爲めか、曰く否々、孔子の述ぶるところわ、天下の公道なり、宇内の眞理なり、何ぞ其道を非なりと云わんや、然則ち孔子ゝ實力なかりしが爲めか、曰く否々、孔子わ十分なる實力を有し居たり、然則ち何故ゝ用ゐられざりしか、曰く時勢之を許るさゞればなり、孔子わ時勢を知らざりしか曰く敢て之を知らざりしゝ非ず、而かも人情（ヒューマニチー）の情と多年養ひ來れる實力とわ彼を驅て終に遊説の勞をとらしめしなり、然りと雖ども孔子が用ゐられざりしを視て屢々大ゝ嘆息し又大に失望し、私かゝ怨嗟の情を洩したるものゝあるが如きわ、即ち當時尚ほ若年たるを免れざるなり、即ち孔子の政治時代わ未だ天道に入ると淺き時とす、蓋し孔子が所謂君臣父子の道たる未だ必ずしも眞理ならざるに非ず、而かも之を行ふと能わざるものゝ向ふてわ、何等の効績をも見ると能はざるものとす、齊の景公わ決して之を惡と云わず、即ち善哉と答へたり、而かも以て用ゐることと能わざりしわ猶ほかの勅語を禮拜讃美するもの多しと雖も之を實行するもの尠きが如し、衛の靈公も亦嘗て仁義の道を知らざるゝあらず、而かも身之

を踐むと能はず、加ふるに日々よ戰伐の急よ臨む、其陣旅の說を聞く亦故なきにあらず、若し夫れ孔子よして一言以て人を德化し一說以て國君を折服せしむるほどの奇蹟力あらばいざ知らず、唯だそれ凡君よ向ひ而かも戰時よ際して而して王道仁義の講釋を行ハしめんと欲す、其難きとや固より也、何ぞ又失望するを用ゐんや。然るを彼れハ屢々失望して又屢々嘆息して嗚呼我道非なる耶吾れ已ぬる矣と叫びたり。ヘンリー、ワルド、ピーチャルハ人情の說敎者たり、嘗て愛の道を說き人類同等の眞理を主張し、大よ奴隷禁止論の爲め、其大辨舌を振ひたり、然れども最早や南北の戰爭となるや即ち出でゝ叫んで曰く、兄弟よ今ハ聖書をのみ講ずる時よ非ず、宜しく聖書を賣て銃劍を買ふべしと、吾人は孔子を譏るものよあらず、其人情の心よりして袖手傍觀するよ忍びず、興きて以て王道仁義を說きたるものゝ如きは、寧ろ至誠止むを得ざるより出でしものなるを以て吾人ハ最も同情を表するもの也、然れども其屢々失望を述べ怨嗟の言を發する處の政治時代を見る時よハ寧ろ孔子よ向ふて天道を說んと欲するの情を起さしむ。蓋し孔子ハ釋伽無尼の如く純乎たる哲學者にあらず又基督の如く靈界の王を以て任じたるものよもあらず、彼ハ實に政治家なりし、其明德を明にせんと欲するや、即ち民を新にするよ在りし、其意を誠よせんと欲するや、即ち天下を平かよするよ在りし、其十哲を從へて諸侯の間よ遊說するや、即ち德行よハ顏淵、閔子騫、政事よハ冉有、季路、言語よハ宰我、子貢、文學よハ子游、子

夏。各々此等を率て以て政治家の大手腕を振いんと欲したるものゝ如し、於此乎輙ち曰く苟も我を用ゆるものあらば期月のみ、三年にして成るとあらんと、又曰く吾れ又夢ゝ周公を見ぎと、又曰く吾れを知るものなきか、吾を知るい夫れ天乎と、又屢々曰く人の己れを知らざるを憂へぎ、人を知らざるを憂ふと、以て其心情を觀るべきなきなり。吉田松蔭嘗て門弟子ゝ語て曰く吾れい願ふ汗馬の蹟、顧いぎ口舌の勞と。松蔭い千百の子弟を其門下ゝ集め之れが薫陶ゝ從事したる人なり、然れども其實い天下ゝ出でゝ以て大ゝ英雄の手腕を振いんとを欲したる人なりし、唯だそれ禁錮の身なるを以て止むを得ず、之を口舌ゝ洩し、英雄却て學者たるの地位ゝ陷おれられしものとす、孔子は英雄にあらず、然れども大政治家を以て任じたるや明か也、於此乎其の己れを用ゆるものなきを見るや、積年の志望遂ぐるゝ由なきを以て、終ゝ憂惋失意に陷らざるを得ざりし、護するものあり或いい云はん汝淺學者喋々すると勿れ固なく必なく我なく意なく之を用ゆれば則ち行ひ棄つれば則ち藏るといい、是れ孔子が悟せしところの天道ゝあらずや、彼れ何ぞ失望せんや、と、曰く否々、孔子が天道（デビニチー）を悟したるい晩年の事なり、彼れが春秋を作し易を繫し知命樂天の境ゝ其神魂を遊ばせたる如きい、一旦失意失望の後ゝ在るなり、彼れい實ゝ實力（アビリチー）を以て起り人情界（ヒューマニチー）ゝ動き而して遂ゝ天道ゝ安んじたる人なりとす。請ふ彼れが天道の時代を說ん、

天道時代對自由自在

孔子ハ學ヨ志シテ其身ヲ修メ、經世の才を養ふて、社會に出で禮を說て上下を巨し、仁を以て天下を治めんとを欲したりき。然而て其實力（アビリチー）と人情（ヒユマニチー）ヨ於ける彼れが資格ハ吾人己ヨ之を論じたり、然則天道に於ける彼れの覺悟ハ乃ち如何。單ヨ實力（アビリチー）と人情（ヒユマニチー）とより視るときヨハ、孔子が失意落膽して我道非耶、鳳鳥不至、河不出圖、吾已矣夫と述べたるが如きハ、敢て批難すべき者ヨハあらず、然れども其天道（デビニチー）より視るときヨハ尙以て卑（ひく）しとなさゞるを得ず、基督ハ轗軻不遇ヨ其世を終りたるものとす、弟子ハ牧者を聲たれたる綿羊の如くに去り往けり。而して其身ハ極刑の木上ヨ懸れり。然れども瞳を定めて大呼して曰く吾れ既に世に勝てりと。彼れは一回だも失望せざりき。蓋し其道の空きヨ歸せず、滔々として天下を濫澤し行くべきものたるを知りたれバなり。孔子も亦た正ヨ斯くあるべきなり。然るを處々ヨ於て嘆聲を發し、失意を表し、而して遂ヨ不平の色を顯ハしたるものハ如きハ、未だ天道を悟ることの淺きを示すものとす。然れども是れ深く責むることなかれ、孔子遂ヨ天道（デビニチー）ヨ入れり。曰く君子ハ世を終るまで名稱せられざるを疾ひ。曰く人の己れを知らざるを憂へず、人を知らざるを憂ふ。曰く君子ハ世を遯れて知られずとも悔ひず、唯だ聖者之を能すと、此三語ヨついて考究し來れ、孔子が其始めヨ名を求めるや明かなり。曰く四十五十ヨして聞へざるものハ是れまた畏るヽヨ足らざるなり。曰く沾哉〳〵吾ハ價を待つものなり。曰く若し吾を用ゆるものあらバ期月のみ三年ヨして成るとあらんと。其

勃々たる英氣外に發して赫灼たる功名を希圖したるとや明かなり然れども其說くゝ人を誤り、動くに時を失して終ゝ用ゐられざるを見るや、乃ち謂へらく、人の己れを知らざるを憂へず、寧ろ人を知らざるを憂ふべきなりと、此ゝ至てか彼れゝ時處位ゝ應用する一段の見識を具へ來れり。然れども未だ功名を脫却するの天道ゝは達せざりし。然るゝ其遂ゝ豁然として天道ゝ入るや、乃ち曰く、君子は世を遯れて知られずとも悔ひず、唯だ聖者之を能くすと。始めゝゝ名稱せられざるを疾むと云ひ、中にゝゝ人の己れを知らざるを憂へずと云ひ、終ゝゝゝ遯れて知られざるとも悔ひずと云ひ、而かも一語を之ゝ附して唯だ聖者のみ之を能すと云へり、彼れが謂ゆる聖域を擧げ、遂ゝ知命樂天の至德境ゝ達したるや明かなりとす、其禮を說くの時ゝ在るや、乃ち曰く、割不正不食、席不正不坐。闇々如たり、鞠躬如たり、踧踧如たり、奬々如たりと。何ぞ其窮屈の人なるや。然れども其漸くにして天道の自由ゝ入るや、心廣く体胖かゝ、鳶飛んで魚躍るの趣きなくんばあらず。之を用ゆれゞ則行ひ舍つれゞ則藏ると云ふ。母意母必母固母我、只だ天道を踐み、天命を樂しみ、其位ゝ處して行ふと云ふ。優々たり、容々たり、何ぞ其れ自在なるや。其學ゝ志すの時ゝ當てや、乃ち曰く、德之不修、學之不講、聞義不能徙、不善不能改、是吾憂也と。然るゝ其漸くにして天道ゝ入るや乃ち曰く心の欲する所ゝ從へども矩を踰へず、君子ゝ入るとして自得せざるとなしと。此ゝ至て更ゝ苦學の痕を見ず、自然ゝして自由なり。吾人ゝ學生ゝ向ふて始めより天道を

説くの危険なるを知る。實力（アビリチー）これ第一ゝ説かざるべからず、人情（ヒューマニチー）これ次に説かざるべからず、然れども若夫れ實力のみならんにハ、徒らゝ血氣ゝ乘じ、功名ゝ馳せ、略數ゝ陷り、智謀に流れ、終ゝ聖德を損するゝ至る。又もし人情のみならんゝハ、空しく悲歌慷慨の涙を流すのみゝて、遂に世ゝ用ゐられず。人を怨み、世を詈り、天を疑ひ、眞理を否疑して果てハ不平不滿の鬼たるに至る。於此乎天道を悟すると極て大切なり。若夫れ孔子をして茲ゝ悟るところなからしめば、或は又其人たりしや知るべからず、孔子ハ晩年ゝ至て漸く易學を研究し始めたり、而して曰く吾に數年を加して易を學ばしめなバ以て大過なかるべしと。易ハ變通自在の活道を敎ゆるものなり、斯語を以て之を推すゝ、此時孔子は從來天道を悟するとの淺きを悔ひしものゝ如し。彼れが十哲を從へて天下ゝ往き、王道を講じ、仁義を説き、若し吾を用ゆるものあらバ治國平天下ハ斯月のみとまでゝ大言するの時ゝ當てや、其氣實に犯すべからざるものあるを見るなり、然れども其氣や未だ血氣の氣たるを免かれず、未だ悲歌慷慨の人たるを免がれず、天道の点ゝより之を視れバ、未だ小兒臭きものあるなり。德川家康ハ天下馬乘の達人なり、小田原の役、人々馬乘の巧を競ひ、種々の乘り眞似をなして以て溪澗の獨木橋を渡るの時、獨り家康ハ馬上ゝ下り靜ゝ手綱を曳て其獨木橋を渡りしとかや、觀者ハ皆謂へらく家康ハ達人なり、必ずや千人ゝ優るの術あらんと、然るゝ達者ハ却て此くの如し、凡そ道を悟するものハ、血氣ゝ馳せず、慷慨ゝ驅られず、進

退自由の天地を有しつゝ、而かも着々其歩を運ぶものとす、孔子を觀るゝ中年ゝ至るまでゝ未だ馬を躍らせて功名の獨木橋を渡るの觀なき能はず、然れども彼れが五十年にして天命を知れりと叫び出すの時ゝ當てや、彼れゝ進むべき時ゝ乃ち進み退くべき時ゝ則ち退き、溥博淵泉時ゝ之を出すの趣きを示さゞんばあらず、子路ゝ曰く千乘の國、大國の間ゝ攝り之ゝ加ふるゝ師旅を以てし、之に因るゝ饑饉を以てす、由也之を爲す、三年ゝ及ぶ比、勇あつて且つ方を知らしめんと、再求ゝ曰方六七十、如くゝ五六十、求也之を爲す三年ゝ及ぶ比、民をして足らしむべし、其禮樂の如きゝ以て君子を俟んと、公西華ゝ曰く之を能くすと云ふにゝあらず、願くゝ學ばん宗廟の事、如くは會同ゝ端章甫し、小相たるを願わんと、曾點ゝ曰く、暮春に春服既に成り、冠者五六人童子六七人、浙ゝ浴し舞雩ゝ風して詠じて歸らんと、此ゝ於てか孔子ゝ喟然として嘆して曰く吾ゝ點ゝ與みせんと。以前ゝ在てゝ孔子も亦た實に子路の氣慨ありしものなり、再求の功名心ありしものなり、公西華の願意ありしものなり、然れども此時ゝ至てゝ最早や脱然として天界ゝ入り、憮然として曾點の志趣ゝ與みしたり、孔子ゝ當時依然として實力を振ゝんと欲するの心を有したりき、人情ゝ燃ゆるの心胸を有したりき、然れども最早や徒らゝ氣慨ゝ驅られず、功名ゝ馳せず、失意不滿の迷界を脱して、陶然天風ゝ御し去るの天道界ゝ入り居りぬ。

嗟呼吾人をして、孔子ゝ就て大ゝ學ぶところあらしめよ、彼

れが實力を養成したる道まに就て、彼れが人情界まに運動したる跡まに就て而して終に彼れが知命樂天の自得境まに入り、優々容々、落々高々、胸中灑落として江漢の之を濯ひ、秋陽の之を曝し、皜々乎として尚ふべからざる底の奥義を極めたる点に於て、大まに學ぶところあらしめよ。是れ孔明が學びたるところのもの也。是れ陽明が學びたるところのものなり、而して今日の如き俗氣の熾なる我邦まに於て尤も學ぶべき必要あるものまあらずして何ぞ。

横井小楠

（余時勢に感するところあり横井小楠を追想し此文を草す）

顧みれば維新の俊傑おのゝ〳〵其の性行言説を異にせり。佐

久間象山は急峻猛烈強情の人なり、聞之象山の姉公、嘗て象山を謂て曰く、象山は君子たるべき温良恭謙讓の德まに乏し、其れ或は非命まに終らんかと。又某の實話あり、曰く某嘗て使して象山の門に至る、象山偶々名馬を得て將まに一鞍を試みんとす、時まに驟雨俄かに至る、姉公曰く、驟雨の過ぐるを俟つ亦よからずやと、象山い將に馬まに跨らんとしてありしが、之を聞て即ち答て曰く、天下の豪傑なり何ぞ雨に怖れんやと、斯く云ひ樣、早や既まに跨り了はり、一鞭叱咤、其聲高く、見るゝまに門外に馳せ出だせり、かくて衆其豪壯を稱するはゞに、雨益々甚しく、而して馬脚失し、象山眞逆樣まに泥土まに落つ、弟子驚き走りていたはりて曰く先生負傷なきやと、象山は其時泥土にまみれて、腰骨を撫しけるが、苦笑して曰く馬術を心得

あるものなり、何ぞ負傷するとやあると。其性情以て觀るべし。

吉田松陰は象山と親交の友たりし、而て師弟の關係をも有したりし、且つ其性情も相投合したるものありしが如し、彼れが冬天怒濤の捲くをも厭いず、北海を佐渡より横りたる如き、其積雪山野を沒するの時より當り、ひとり大劍を横へて、東北地方を漫遊したるが如き、其海外に赴かんとして、友人の之を止めしとき、「我志既に決せり、たとひ刀水逆流するとも、富嶽海に移るとも我志は變ずべからず」と、大喝破したる如き。以て徵すべし。然ども松陰い象山より平民的の人なり、從容人をいるゝ量に於ていい、寧ろ廣きものありしが如し、松陰は弟子を友人を稱し、之を同輩視し、更に師匠ぶるの躰なかりし。然ども象山い其弟子を御すると至て嚴峻なりしと云ふ。越後長岡の傑士、河井繼之助、初め象山の門に居りしが暫時にして、象山を謂て曰く象山い師とするに足らず、彼れい徒らに弟子に傲ると、即ち去て山田方谷に就き大に其温德と經世の才とに服したりと云ふ。

藤田東湖い或人の評に壯士の親方の如しと云へり、是れ蓋し戲評なり、然ども此言や彼れが磊落豪快の性を說き得て妙なりと云ふべし、彼れい所謂天地正大の氣を吐て、豪言壯語、慷慨欝勃、孔子の弟子ならば子路の如き、基督の弟子ならば、ペテロの如き人なりしが如し。其始て横井小楠に會ひしとき、彼れが木綿の粗服にて忙躁躍如として現いれしが如きに、以つて觀るべし、人ノ士ニ處スルヤ空虛ヲ以テ是ヲ待ツ

說を以て之を云へば、象山と松陰とい固より同說、異なるところなし、と謂ふて可あり、松陰が遠遊の志を激したるものい象山なり。象山、松陰等い惟へらく、今や外患濱際(なぎさ)ゝ迫り、内憂目前ゝ在り、之を内にするも之を外ゝするも、兵機戎法の、忽かせゝすべからざる、蓋し今日より急あるいなし、宜しく鵬翼を萬里ゝ搏ち、歐米文明の利器を調査し、其用法を學び來り、内以て内亂ゝ備へ、外以て外患ゝ應じ。遂ゝい我神州男子の武勇をして、五洲萬國の間ゝ猛發せしむべしと。而して藤田東湖西鄕南洲其他攘夷的の武夫(もの)等は、いと聲高く寶刀難染洋夷血を吟咏し、彼れ醜虜何者ぞ、若夫れ我黨をして其志を得せしめなば、一戰彼等を塵盪し去り、還者僅三人たらしめんなど、屢々劍を撫して海上を睨みたるの徒なりし。

此外維新革命の原因たるべき、人物、思想、并に說論、蓋し二三ゝ止まらず遠く之を求むれば、賴山陽梁川星巖の類の如し、彼等い儒教的の眼孔を以て覇道を忌み、王道を冀ひ、如何ゝもして其意を天下に知らしめんものをと筆墨の間ゝ盡力したり大盥中齋の類の如きい、幕府の暴政を憤り、民の疾苦を是れ傷み、如何ゝもして、抑壓の軛を碎かんものをと、ヒューマニチーの心腸を摧して、之を實地に行いんとを希望したり、滿生君平、高山彦九郎の類の如きい、所謂る歷史的の忠情ゝ動かされて、其身を楠公ゝ比して起ち。大藩自負の猛士の如きい、眼を放て屢々元龜天正の往古を追想し、幕府の起りたる由緒來歷を腦裡ゝ留め、イザ事あらばと代々磨し來れる名刀を擁して、四海波靜なる天下を喜ばず、君辱臣死の

魂膽を懷て、恨を日々の抵屈に忍びたるものなりし。此外に當時に在ては蘭學者流なるものあり、此類は夙に歐洲の形勢に通じ、醫術、天文地理を始めとし、政治、法律、軍旅の事に至るまで、皆燦爛として視るべきものあるを知り、或は之に心醉し、或は之に驚愕し、或は顧みて我國の井蛙たるを嘆じ、或は進んで之を我國に致輸せんことを希望し、彼れの學を脩め、彼れの術を習ひて、一日も早く文明の民たらんことを念するものなりしなり。此他時の政府、即ち幕府に在るものゝ考へ、左すが天下の政事を司どりし丈ありて、萬國の形勢を知らざるにあらず、內國の急患を察せざるにあらず、然れども何分三百年の昌平に慣れたる侈靡軟骨の麾下を以て、內外の國難に當るに足らず。鼠首狼狽前臺後跋竟に爲すところを知らず、鎖港せんか、敵艦已に江城の近きに迫る、開港せんか天下の猛士群り起りて皆我に反抗せんと必せり。於此乎恰も杖を失ひし盲者の如く、漸く一歩一歩を危ぶみながらに迫り行き、傍人の右せよと云へば即右し、左せよと云へば即ち左し、苟偸因循として、彷徨ふ中、終に溝壑に轉落したるものなり。左れば幕府は一定の主義も、經綸考說もなかりしを知るべし。伊井公の如きは、一時その硬骨を振ひしと雖ども畢竟するところ頑僻の人國家の大經を行ふに足らざりしなり。

然るに余輩今横井小楠の傳を讀み、退て其性行并に其識見を察するに、自ら以上の諸俊傑と其趣を異にしたるものあるを見るなり。惟ふに横井小楠は聰明敏活高邁脫落の人、而

して勝伯の云へるが如く「胸呑五州眼空一世」の大氣象を早く已に養ひ得たるの人なるが如し、其豪傑的の血性に於てゝ、象山松陰東湖等に及ばざるべし、然れども氣宇豁達にして六合を包容したるの大魂より之を云へば、象山松陰東湖等ゝ已に既に小楠の腹中に在り。象山松陰東湖等ゝ慷慨悲歌、動もすれば劍を撫して起んとす、然ども小楠ゝ從容として前後の策を案じ、茲に大經綸を建てざれば起たず、象山等ゝ子房、韓信、關羽の概あり、而して小楠ゝ孔明、呂望、蕭何の趣きあり、勿論象山等とても何れも文人にして武人にあらず、此故に西郷の如き平野の如きものとゝ大に其類を異にするものありと雖ども、亦た小楠等に之と比すれば、寧ろ武人に類したるものあるを見るなり、其學問の種類より之を云へば、一方ゝ靖獻遺言、孫吳の韜略等の類を是れ喜び、小楠等ゝ孔孟の書堯舜の政治等を是れ味ひたるものゝ如し。小楠一夜某と樓上に閑語す、兒徒あり、白刃を提げ階を上り來る、小楠之を見て早くも身を起し、賊の傍側より逸して去る賊擊刺に遑あらざりしと。是れ小楠の小楠たるところなり。若夫れ他類の人ならしめば、或ゝ覺悟して之に抗するか、或ゝ逃脫の機を失したるならん。かく云へばとて小楠は憶病の人にあらず、又温良的一偏の君子にもあらず、其英氣人を壓し、時に或ゝ時俗に觸れ、終に藩廳より歸國を命せられたる如き、又時としてゝ赫として怒り、霹靂一聲屢々傍人を驚怖せしめたる跡の如き、以て其心膽を觀るべし。

其學問上に就て之を云へば、小楠は元と朱子學に由て養ゝ

れたり、然ども當時の學弊として、兎角は支離滅裂に馳せ、訓詁文義は區々たるを見て、意大に慊然たらず、去て陽明格知の學を窺ひ、大に得たるものあるが如し、然れども其學を王派と稱ふるおそれを好まず、寧ろ往々其非を說き自らい依然として常に「我朱子學」と稱へたり、蓋し小楠の眞意い朱王俱は徒らに舍つべからず、彼の支離滅裂の弊は朱派の末流の爲せしのみ、王派とても寂禪異端の識を交へたるより、其弊害を摘せば、擯斥すべきもの尠からぜ、故に矢張り朱子を宗とし、王派を他山の石と惟ひしに由るならんか、但し其詩文を閲し、又其說を聽くに、當時に所謂る朱子學とは大に其趣を異にし、寧ろ陽明に近きものあるを認めずんいあらず聞之小楠は諸家渉獵の上、遂に獨得するところあり、中比お至てい、ズット溯りて孔孟を說き、尙進んで堯舜を祖述し、最後に大に發明するところあり、末年に至りていい、只「天」を說きしと云ふ、然則小楠い遂に獨得識見の人となり、朱を云いず、王を云いず、孔孟を云いぜ、堯舜を云いず、唯それ茲に千古の眞理と天地の公道とを確認し來り、之を以て其學の根源たらしめしと見ゆ、而して其所謂る天あるものい猶は彼の大盤が自得の大虛の如き、陽明が自得の本良の如き、朱子が自得の理の如き、孔明が自得の靜の如きものと大同小異たるが如し、乃ち小楠が得意の詩に

神知靈覺湧如泉、不用作爲付自然、前世當世更後世、通貫三世對皇天、

而して之に自注して曰く

明前世王者之道、盡心於當世、以開後世、謂之君子之志

又春嶽公ニ和し奉る詩ニ

斯道在懷三十年、向公一日始談天、天行如此公看取、雨雪風雷發自然

又偶作ニ

道既無形躰、心何有拘泥、達人能明了、渾順天地勢、

又

彼是又非此、是非一方偏、姑置是非心、心虛即見天、心虛即見天、天理萬物和、紛々閑是非、一笑付逝波、

或ハ「皇天」と云ひ或ハ「天行」と云ひ或ハ「天地勢」と云ひ或ハ「心虛即見天」と云ふ。其味いしところ「天」ニ在りしや知るべし。其れ已ニ「天」なり此故ニ度量の高濶なる所論の無私なる、氣象の超脫せる、智識の無盡藏なる、去就の自然なる心胸の洒落たる實ニ一世ニ冠たるものあるなり。此點ニ於ては當時の諸傑等ハ恰も兒童の如く、而して獨り小楠ハ大人の如く、彼等ハ伊豆の諸山の如く、而して此れハ富嶽の天表ニ聳ゆるが如し、夫れ即「天」なり、此故ニ予れ佐久間象山の肖象を視るニ嚴然として坐す、吉田松陰の肖像を視るに嚴然として起んとするの趣きあり、然ども横井小楠の寫眞影を閲し來れば、素絹の上下を着し、泰然自若として立ち面して而貌將ニ笑ハんとするの狀を呈す。勿論肖像寫眞の如きハ以て人物を評するに足らず、然ども性行の相異なる、自らその肖像ニあらハるゝものあるを見る、亦奇ならずや

又小楠ハ藤田東湖と尤も親交なりし、然ども彼れが天下の

大經を建つることを後にして、而して徒らに慷慨悲憤するとの非なるを辨じ、議論常に合へず、即ち左の詩あり。以て其見識を觀るべく又以て當時列藩の諸俊髦を壓倒し居たるの跡を見るべきなり、

臘月念五日、藤田子登招飲、列藩諸友在坐、賦七古一篇述志、痛加切磋、是所願望、

家各東西千里隔、相逢一笑吐肝膈、滿甕之酒新發醅、併嚙道味眞爲適、吾輩從來非文士、動輒意氣論成辟、上自三代下明清、及我皇朝治亂迹、如是而治如此亂、此乃得術彼可惜、究竟天下明君少、是以亂日滿史冊、雖然爲臣豈尤君、彼尤君者心不赤、赤心忠愛自有道、徐格君心是臣職、慷慨悲憤氣即氣、恐於國家無裨益、炎漢朱明亡可徵、何事君子心甚迫、嗚呼臣道豈如此、一點忠愛發魂魄、其容靄然如春風、其神凝然如金石、治亂只是盡我心、不與群小爭黑白、聖賢之教如此耳、萬古臣道不可易、而在我輩動任氣。一言一行渾被役、忠愛仕君何在哉、甚耻頑顏對典籍、良會知多不易得、何說風月弄文墨、諸君應各有所思、試披肝膈向坐擲、

此の篇い小楠が中年の作よかゝると雖ども其衷情、膽畧、識慮、度量、赤心忠愛、悟道經綸、早く已よ此よ露るゝものあるを以て予輩い殊よ之を採錄したり。

吉田松陰の傳を見るよ彼れい終始至誠を以て其銘箴となせり、然ども其伊井直弼を刺さんとし、已よ他藩の先だんとするあるを聞くや、我藩其後よ從ふべからず寧ろ諸藩に先たちて京師よ入り、間部下總守を斫るべしと云ひし如き、未

だ天躰無私自在の點より到着せず。象山が知らざるを知らずとすると能いず弟子の質問を叱し去りおき、密かに騎して實砲を驗し來り、以て其難題に答へし如きい、未だ天然洒脫の點より達せざりしを證するに足る、然るに今横井小楠を觀るに、小楠い流石に「天」を說きし丈ありて、終始世人の爲に指目誹毀せられ、一生坎坷の間に其身をおき、不絕憂國の情に燃へしと雖とも、敢て猥りに嘆慨悲憤せず、優々閑々迫らざるの風ありて、而て神智靈覺に任せて雨雪を自然に發せしめ、電雷を時に應じて起し來り、百事を天に憑て判下し去り、百年を其胸臆に經綸し、天下の大勢を達觀し、至道の源頭に立ち、而して我大日本帝國の國是の如何を指示したる有樣い、兎ても象山、松陰、南洲等の企て及ぶ處にあらざるを觀るなり。小楠が獨り秀天英蓉の如くして當時に卓立するもの蓋し此のゆゑに由る、

是れ予が維新の諸俊傑に比して小楠を評騰するの大略なり、而して予は固く信ず、予は決して過賞溢美の誤に陷らざることを、然れども若夫れ松陰南洲等が優るところを謂はしめば、予い乃ち云いん、其の人を感化し、薫陶し、奬勵し、卒ひて以て其意を行いしむるの電氣力（マグネチックフオース）に於ていい、小楠い數歩を他の俊傑に讓らざるを得ず、又其經綸を實行するの手腕に於ていい、予い寧ろ西鄕木戸等を推さんと欲す、此故に松陰等い齡僅かに三十前後にして未だ壯年血氣の短所を暴いすと を免れざりしと雖も、其門下に續々豪俊を輩出せしめ、今日の日本をして今尙ほ松陰の支配するが如くあらしむるゆ

えんのものゝ、小楠が遞焉及ばざるところのものとす。蓋し孔子ゝ言ふと勿らんと欲と雖ども、顏回ゝ默して之を無言よ悟し、佛や花を拈じて口言はずと雖ども、迦葉ゝ哂ふて已に其奥を穿ちたり、其形はるゝを學ぶや易く、其形ゝれざるを學ぶや難し、松陰の如きゝ其學び易きもの、然ども小楠の如きゝ、自得のこゝに臻らずんば、遂よ學び得べきよ非ず、宜べなるかな、滔々たる青年、今尙ほ松陰等を學んで、而して小楠を味ふものゝ尠きや。

今夫れ孔子は堯舜を祖述すと云ふ。孟子も堯舜を祖述すと云ふ。朱子も堯舜を祖述すと云ふ。陽明も堯舜を祖述すと云ふ。然而て莊子も亦た尙ほ堯舜を祖述すと云ふ。其の議論相于搭するところなきよあらず。否時としてゝ其說全く相反するものあり。然るを尙ほ以て皆悉く堯舜を祖述すと云ふ。何ぞ其れ奇なるや。蓋し堯舜は眞に果して如何なる人物なりしか、孔孟之を寫し來れゞ則孔孟が理想的の人物となる。莊子之を寫し來らゞ則莊子が理想的の人物となる。朱陽之を寫し來らゞ則又朱陽が理想的の人物となる。此故ゐ今より此れが眞物を知る。實よ容易ならざるものあるなり。然ども愚見を以て之を觀れゞ、縱令ひ孔、孟、莊子、朱、陽、等各々獨得の識見を具へて、而して堯舜を觀察したるものありとは云へ。其間また一貫同察の點なくんゞあらず。何をか一貫同察の點と云ふ。曰く。堯舜が光明無私なりし事、是れ一ッ。經世の聖能ありしと、是れ二ッ。其黽勉民よ盡したる事、是れ三ッ。凡そ此三ッのものゝ孔、孟、莊子、朱、陽其他如何なる、異說者の出

るあるとも、其堯舜を祖述すと云ふ限りは、決して反讃すると能はざるものとす。蓋し私慾者は以て理想的の人物となすに足らず、無能の愚物は以て理想的の人物となすに足らず、而して死灰仙骨は化成し去り、更に世人の益たらざるものは、固より理想的の人物となすに足らざれば なり。

孔孟は其治國經世の道を稱し、莊子は其無私無我無爲の德を揚げ、朱子は其窮理正心修己の所に服し、而して陽明は其本良を據べて廣く之を民に及ぼしたるの工夫を拜す。

其世を異にし時を同ふせざるを以て、從て亦た其說の傾向に大なる影響を及ぼしたるものありと雖ども、其堯舜を宗として、而して此が祖述を勉めたるの上に於ては、余等は何れも其附會牽强に出でざるを知るなり。

今横井小楠が說に曰く

明堯舜孔子之道。盡西洋器械之術。

何止富國、何止强兵。布大義於四海而已。

小楠は如何なる眼孔を以て堯舜孔子を觀たるか。是れ第一の問題なり。蓋し小楠は前文にも演べたるが如く、堯舜孔子を祖述し來りて、而して遂に『天』に達したりと云ふ。然則小楠は堯舜孔子が嘗て天體無我の聖城に其心魂を遊ばせたるの跡を追慕し、而して其道を明にせんと欲したるや知るべきなり。

王陽明嘗て清明の夜、天體無我の聖境を眺めて、覺へず吟聲を發して曰く

夜氣清明。無視無聽。無思無作。

淡然平壞。就是義皇世界。

と何等の秀麗。何等の高邁。何等の洒爽。而して何等の廣濶ぞや。陽明の心い此ゝに至りて全く天體と合一せり。横井小楠も亦た大ゝ此處を味ひ居たり。其不用作爲附自然と云ひ。其談天と云ひ。其の心虚見天と云ふ。即ち是れ陽明の心と同一なり。

堯天下を許由ゝ讓て曰く日月出づ、而して燎火息まず。其光に於ける亦た難からずや。時雨降る、而して猶ほ浸灌す、其澤ゝ於ける亦た勞せざるや。夫子立たば天下治まらん。而るに我れ猶ほ之を尸る。吾自ら視るゝ缺然たり。請ふ天下を致さんと。是れ實ゝ天躰無私の處とす。故ゝ曰く堯天下の民を治め、海内の政を平ゝし。往て四子を藐姑の山に見。汾水の陽。窅然として天下を喪へりと。

舜い元來天下を望みたるにあらず。歴山ゝ畊して自得せり。雷澤ゝ漁して樂しめり。河濱ゝ陶して喜べり。其居る處、聚を成し、邑を成し、都を成す。是れ亦た自然に附したるのみ、敢て好んで策したるゝ非ず。堯之を畎畝ゝ擧げ。攝政ゝ任じ。之ゝ妻いすゝ二女を以てし、而して終ゝ天下を讓れり。舜は許由の如くゝ之を辭せざりき。蓋し許由い名實の議論を爲し。鷦鷯偃鼠の自得を演べて、而して天下を用て爲すところなしと云へり。是れ未だ私我の觀念あるを免かれず。然ども舜い名實の議論も鷦鼠の自得も、天下の所用も、更ゝ云々するところなく。吾れもし天下の爲めたらば、又何事をも辭せざるなり。吾れもし天下の爲めたらずんば、又何事をも爲さゞる

なり。其王公たるも、柝吏たるも、官に在るも、野に在るも。進むも、退くも。出るも、入るも。此等い更に問ふとおろかあらず。吾れい己に到る處に自得せざるなきなり。帝位を踐む、敢て喜ぶところにあらず。漁農に隱る、亦た敢て悲しむところにあらずと。是れ舜の心たるなり。故に曰く舜有天下不與。と

一方より之を觀れば、孔子にい望位の念勃々禁ずると能いざりしものゝ如し。曰く沾らん哉〳〵我い價を待つものなり。曰く若し吾を用ゆるものあらば期月のみ。曰く人の己を知らざるを患へずと。然而して其接々遑々して諸侯に歩き、終に其遇せられざるを見るや、乃ち其氣を春秋の著作に洩して終りぬ。堯舜の心に比して之を云いゃ、其無私平坦の點に於て或い數等及ばざるものあるが如し。然ども其時勢を

考へ、其人物の性行を想ひ、而して又他方より之を觀るときは、其堯舜が光明無私の心を師表と仰ぎたるや亦た知るべきものあるなり。

門弟子、孔子を評して曰く子絶四焉、毋意、毋必、毋固、毋我と是れ即ち天躰無我洒瀟の境にあらずや。孔子又自ら舜を評して曰く無爲而治者其舜也歟と。又其顏回と相對するの時、語て曰く。用之則行、舍之則藏、唯我與爾有是夫と。又其諸弟子が望位勃々の情を洩して之を揚々と辨ずるの時。唯り曾哲を稱して嘆じて曰く吾い點に與みせんと。

是に由て之を觀れば、孔子も亦た遂に天躰無私の心を失いざりしものと知らる。其發して望位の念となり。其進んで遊說の勞となり、坐席だも暖まるに暇あらざるとしゆえんのも

のゝ、誠に以て天下蒼生の爲めゝ忍びざるものありければなり。

横井小楠が堯舜孔子の道を明ゝすと云ふものゝ、其一ゝ即ち此無私無慾無功無名の天位ゝ居て。而して賢を擧げ、能に任じ、已れを忘れて天下を思ふの上ゝぞありける。

當時天下の狀態を觀るゝ、三百の諸侯各々儼めしく、其位ゝ在りと雖ども、多くは皆鈍蒙ゝして天下の政を行ふゝ足らず。又其の之を補翼し以て其君を堯舜にすべき責任ある家老執權の如きものゝも、是れ亦た徒ゝ祖先代々の官職を襲ひ來りたるゝ過ぎざるものの多く。以て共に天下の事に當るゝ足らず。於此乎、此時ゝそ廣く賢者を擧げ、能臣を用ひ、治國經世の爲めゝ大に盡力すべき時なるゝ。俗物の光明なる能ゝざる、小人の無私なる能ゝざる第に之を用ひざりしのみならず、之を忌み、之を卑しめ、彼れゝ小官なり、用ゆべからず、彼れは無格なり、其職ゝ當らずと。猥りゝ爵官祿位ゝ誇りて、而して天下の炭々として日々ゝ益々危きものあるを顧みぜ。生々たる蒼民をして將ゝ其歸するところを知らざらしめんとす。其れ已れ已ゝ聖人なりと雖ども。尙ほ其缺然たるを見るときには、乃ち其位ゝ居ることを屑とせぜ、去て天下を他人ゝ讓らんとす。是れ堯の心なり。已れ已ゝ畎畝より上りて正ゝ人生の光榮を極む。然れども敢て以て心情を變せぜ。彼れゝ悲しまず、此れに傲らず。偏ゝ以て聖者の己ゝ代るべきものを求む。是れ舜の心なり。人君よろしく此心なからざるべからぜ。人臣よろしく此心を躰せざるべからぜ。是れ即ち

光明正大の心なり。是れ即ち宇内の眞理なり。是れ即ち天下の公道なり。此心此眞理。此公道是れ即ち堯舜孔子禹湯文武周公孟軻荀莊朱陽の唱道したるところの聖道とす。否々。是れ人作の道ゐあらず。即ち皇天無私の大道とす。此故に履頭冠足の習慣を破らざるべからず、萬機公論に決せざるべからず。乃ち堯舜孔子の道を明らせざるべからずとい、蓋し是れ當時小楠が意衷のありしところを知るべきなり。

今夫れ藩と云ひ閥と云ひ、敢て從來の勳功を稱し。已れ已に老するゐるを顧みず。已れ已に時勢に晩れしものゐるをも顧みず。已れ已に無識無能たりしをも顧みず。之に爵を與ふれい、則揚々として威張り、之に職を授くれば則躍々として出で、只だ其れ我私を是れ思ふ。是れ堯舜の道にあらず。其未得之也、患得之。既得之、患失之。苟患之、無所不至矣。とい是れ孔子が鄙夫の其君に事ふるものを形容したるの語にあらずや。小楠い決して斯る人物にあらざりしなり。民間に必ず遺賢ありと云いず。風塵中に必ず俊客ありとい云いず。然ども凡そ吐哺握髮以て民に臨まば、豈亦た其人なからざらんや。然るを其計此ゐ出でず、黨を組み、私を結んで、而して只だその位を失はざらんとを是れ勉む。是れ堯舜孔子の道に非ざる也。

尤も其私を忘れ國家を思ふて、而して進んで、其位に當らんとす。是れワシントンリンコロン等が大統領に上りたるゆゑん、孔子の棲々遑々たりしゆえん。而して堯舜の其位を有ちたるゆえんなりとす、然ども其徒らに私情を交へて而し

て公明の政道、天下の要具を顧みざらんとす。是れ小楠等が爲す能いざるとおろのものとす。若し夫れ小楠をして今日の朝に立たしめなば、則正よ云ふなるべし。自由黨何ぞ。改進黨何ぞ。民黨何ぞ。吏黨何ぞ。凡そ何一人にても何黨にても、誠よ善く明德を明よし。富國强兵の實を擧げ、修身齊家の道を萬民よ行いしむるものあらば、則ち直よ之よ內閣を讓らんと。而して宵よ口に之を唱ふるのみならず、心誠よ之を好みて、而して一日も早く其優者の出るとを待んや必せり。左れば其誰人にもあれ、何れの處より出るゐもせよ、凡そ其の之を能くすと云ふものあらば、則喜んで其者よ接し、其說を聽き其議論を闘はし。其人物を商り。而して優々容々光々明々百事國家の爲めよ去就を決すべし。又何ぞ秘密的よ仇讐的よ其人を待せんや。是れ堯舜の心に非ず。

聞く歐米にては、其如何なる反對黨よもあれ、其私交を見るときい、恰も友人よ異ならずと。蓋し左もありなん。其意見こそ異なれ、其官民の差別こそあれ。齊しく是れ國家の爲よ謀るものとせば。相互よ相交り、益々彼我の情を審よし。逾々自他の說を明よし、而して誤見誤解のなからざらんとを冀いさるべからず。蓋し大事の破裂い往々誤解より起るもの多ければなり。然而して若夫れ誤見誤解を除て而していよゝゝ主義の異なるありとせば、則相方其說を述て以て天下の公道よ出で、正々堂々君子の爭をなすべきのみ。又何ぞ隱々暗々たるの陰事よ出んや。

是れ歐米人士の心たるべし。是れ小楠が心たるべし。是れ天

躰無私光明の心たるべし。而て是即堯舜の心なるなり。

勝海舟嘗て屢々刺客に遇へり。乃ち悟して曰く衆怨しかく我れに迫る。我れ畢に免がる能わざるべし。已に免かる能わずとせば、之を拒ぐ亦た無益なり。たとひ之を拒て其一二人を斃すとも我れもし畢に免れずとせば、徒に無益の殺生を爲すに過ぎざるべしと。乃ち爾來敵に向ふて揚言して曰く。凡そ誰にても予を殺さんと欲するものは、即ち自由に殺さすべし、但しその予を殺すの前に當りてよろしく我心胸を誤解せざらんことを是れ勉めよと。於此乎、即門の護衛を絶ち。内は婦女のみを以て從事せしめ。常に刀に紐して待てり。其後刺客又屢々入り來れり。海舟乃出でて迎へて曰く。公等我を刺さんとて來るか。さらば來れよ、我れ我が主義綱領を述べて後、而して從容死に就かんと。刺客また其旨を領す、海舟乃ち彼等を奥の座敷に誘ひ、之に茶を吸み、菓子を呈して後、徐ろに其心胸を吐述し去り。かくて曰く。予れ已に身を以て國事に殉ふ。敢てまた死を辭せず。今已に我心胸を吐述し了れり。公等もし尚ほ我心胸を非なりとなし、又予が主義を曲なりとせば、則國家の爲めに予を刺せ、予れまた國家の爲めに請ふ公等の刃に死せんと。於此乎刺客は往々にして其誤解を知り、其猜疑を晴らし。而して終に其公明の心に服して、敢てまた彼れを殺すに能はざりしなりと海舟は其悟道に於て横井小楠を學びたるものとす。其の之れある亦た怪しむに足らざるなり。

其私を以て云ふときは、ドコ迄も幕府を押し立てゝ薩長

ゑ抗し、潔よく一大決戰を爲す。是れ最も願ふところのものとす。然ども天躰無私公正の心より觀るときゝ、宜しく大政を奉還し、江城を引渡し而して內ゝ以て戰爭の慘怛萬民の疲弊を救ひ、外ゝ以て洋夷の其機に乘せざらんことを慮るべきなり。此故ゑ猛斷勇決、席を蹴立てゝ、慶喜を諫む、是れ海舟の爲せしところなり。而して海舟ゝ其心を小楠ゑ學べり。否是れ小楠の心にあらず。即ちまた堯舜の心たるなり。

嗚呼小楠今や朝ゑ無し。宜べなる哉。維新公明洒脫の政道往々ゑして其跡を爵位功祿の重雲ゑ隱して、而して再び復た舊幕時代の俗界ゑ復らんとす。吾人ゝ又た實ゑ堯舜を祖述せんと欲するの情ゑ堪へざるなり。

横井小楠ゝ已ゑ堯舜孔子の道を學び、其神髓を洞觀し、其天躰無我の聖胸を悟し、來りて、謂へらく。當今天下將ゑ多事ならんとす、內にゝ無能無力無道無德の俗輩紛々として飛舞翱翔し、而して國家の將ゑ大禍に瀕せんとするあるをも顧みず、只だそれ私名私利私慾をのみ是れ慮る。誠に憂士腸を斷つの秋なる哉。外ゑゝ洋夷隙を窺ひ將ゑ狼虎の慾を逞ふせんとし。危機一髮に迫る。丈夫國ゑ盡す、當に今日ゑ在るべしと。此ゑ於て乎、一ゑは天下の動靜を伺ゝんが爲め、二ゑゝ天下ゑ人あるや否やを知んが爲め、諸州漫遊の途に上り、東都ゑ來る。水戸烈公其名を聞き之を收用せんと欲し藤田東湖をして內諭を傳へしむ、小楠辭して就かず。後又京師ゑ來る。時ゑ梁川星巖其學を稱し亦た勸めて帷を京師ゑ下さしめんとす。小楠笑ふて應せず。國ゑ歸りて浩嘆して曰く天下

無人と、而して慨然自任するの志益々切なりし。

蓋し小楠の着目するところゝ天下の公道なり。宇内の眞理なり。光明無私の大虚心なりし。而して此大虚心より雲を呼び、風を起し、堯を出し、舜を生み、孔子を立たしめ、周公を動かしめ、無道を誅し、亂臣を匡し、驩兜を放ち。天下を裁し。功利を忘れ、褒貶を忘れ、周圍を忘れ、内外を忘れ、情實を忘れ、爵祿を忘れ。而して公々正々。只だそれ億兆の幸福と國家の富榮とゝのみ其心思筋骨を勞せんと欲したりし。故に大藩に聘せられて高祿を食む、是れ私の以て喜ぶところ。然ども慷慨徒ゝ氣ゝ任ずるが但しゝ、他情の其間に横いるを看るや、即飄然去て就かざりし。帷を京師ゝ下し以て儒門を張る、是れ俗の以て榮とするところ、然れども區ゝ一隅の得色、是れ大魂

の耻づるところ、故ゝ笑て之に應ぜず、平然鞋を穿つて故山に歸り、自ら炊て天下の爲めゝ時を待てり。

凡そ大物の天下を負ふや、皆概ね此くの如し。當今才を賣り、智を鬻ぎ、學を衒ひ、文を舞いして、諂ゝ利祿の街ゝ彷徨ふもの丶如きゝ國家の爲めゝ自ら顧みて可なり。

かくて小楠已ゝ故山ゝ歸り、一村に家塾を設け、益ゝ修養練磨の工夫を積み、廣く子弟を聚めて之を教ゆ。而して其名漸く天下ゝ重し。時ゝ國家愈ゝ多事ゝ赴けり。曰く米艦浦賀ゝ來れり。曰く魯艦長崎ゝ入れりと。而して天下恟ゝ。民、寢食を安んぜず。執政、其途ゝ迷ひ、災害立ところゝ迫らんとす。小楠茲ゝ於てか書を藤田東湖に送りて曰く若し夫れ止むことを得ざれゞ開戰亦た辭すべからず、然ども戰端を開く如きゝ

應答其當を失ふに由る、故に其應答の辭理精詳ならざるべからざると。時に水戸烈公政治の大議に參せり、故に其慷慨事を誤るべからざる旨を諷したるなり。又幕吏川路某將に長崎に赴て以て魯國の使節に應對せんとす。小楠之を聞くや、即ち身自ら先づ馳せて長崎に下行し、其處にて夷虜應接大意なるものを著し、以て外人に應接する宜しく義理禮節を失ふべからず、又開鎖共に正々堂々、眞理公道に由て決すべき旨を辨說し。之を港尹某に贈りたり。

吉田松蔭も亦た此時同じく長崎に赴き、將に機を窺ふて航海の志を果さんとを欲したりしが、折節一友人に逢ふて曰く何ぞ醜夷を斫らざりしぞと。當時松蔭等の所謂る慷慨悲憤の壯士なりし。其全世界を漫遊し來りて以て大に內外に當らんと欲する大志に於ての固より尋常一樣の壯士を以て觀るべからずと雖も。然ども其徒らに匹夫劍を撫して立つの擧を快なりとし、一虜を斫らば則ち國權を擴張したりとなし。一夷を誅らば則大和男兒の氣骨を一振したりと思ひ、腕を扼し、目を瞋らし、口角泡沫を飛ばせて以て頻りに外人を喝罵せし壯士の仲間に近きものたりしや知るべきなり。又當時西鄕、大久保、藤田、佐久間、の類の如きの已に前條に論じたるが如く、其の氣まことに隆んに、其の膽まことに大に、其一片憂國の志の凛然として斗牛を穿つものありしと雖ども、然れども其の「天地の氣運、萬國の大勢の到底人爲を以て私すべきにあらず」と看破し來りて茲に斷然と開國を主張し「神飛六合中」と高吟して、而して其遂に大義を四海

と布かんと欲したる小楠が達觀卓立の大魂に之を比すれば、予れ其寧ろ幼なるを看るなり。

蓋し小楠い謂へらく。凡そ吾人い虛心以て宇内の大勢と洞察し、百年の大計を畫策し。内は以て國家生民の治安を是れ求め、外い以て凛然對峙の精神を是れ保ち。内外共と公道と由り眞理と處し以て優々去就進退を決すべし。一夷を仆し一虜を擒にす、以て國權を輝かすと足らず。劍を揮ひ槍を捻る、必ずしも和魂を示す途とあらず。且つや通商い天下の勢理亦止むを得ざるに出づ。是れを是れ徒らと拒んで以て彼等を拂いい、則適以て衆敵を天下と作り、畢と我國の亡滅を招くべきのみ、殷鑑照ゝ、其跡海外と乏しからず、左れバとて また只だ唯ゝ諾ゝ徒と屈して以て彼等に從はバ、畢と彼等の輕侮を招て其局國を舉げて全く彼等の自由に任すと至らん。其跡また實に海外と尠からず。此故と彼等もし理非を辨せず、徒らに暴を以て我に迫り、賊心を以て我に向いば、我乃ち猛然至道と立ち公義と訴へて。以て之に抗し、たとひ全國を舉げて灰燼たらしむるとも亦た辭すべきところと非ず。然ども彼等もし天下の大勢を說て我に請ひ、平和の道を以て我と談じ、友誼を示して以て我と交いらんと欲すると、我猥りに猜疑を抱き、敵意を挾み、之を擊ち之を屠りて以て、自ら其意を得たりとせバ、其曲我に在りて彼とあらず已と其曲我に在り、たとひ幸として、戰勝を奏するとも、虛心以て宇内の公道と憑て之を判せバ、正に天下と對して愧なき能いず。故と先づ辭理を詳とし、禮節を盡し、而して以て彼等と對

し。彼等もし強て尙ほ暴慾を逞ふせんと欲せば、則其時こそ我等ハ渾身の義勇を振ふべきのみ。然らば則たとひ不幸ヨして、戰、勝を奏せずとも、天下の眞理、宇內の公道に照して之を云ハバ、則我直ヨして彼れ非なり、又何ぞ其の成敗を說んやと。是れ小楠が懷きしとおろの說なりしが如し、

されバとて小楠ハ對外防國の策を講ぜざりしに非ず。其陸兵問答、海軍問答、强兵論、幷ヨ海外の形勢を說き併せて國防を論じたる諸書を觀て知るべし蓋し當時小楠ほど海外萬國の情勢を詳にしたるものは稀なるべし。其魯英の關係を論ト、其米國の國狀を說き、其兵法、砲術、醫術、宗敎、政治の綱領等を擧げ來りて以て滔々辨說するところを視るヨ摘々掌上を指すが如し。

小楠ハ海外の文明國ヨ輿論若しくハ言論の自由、若しくハ公共の政等の言說事跡あると見て、敢て新奇なる感想を起さざりし。何となれば是れ即堯舜禹湯文武周公孔子の唱道したるものなればなり。於此乎先づ天下ヨ先て建白して曰く、廣く賢を撰で政官たらしむべし。曰く大ヨ言論を開くべし。曰く天下と共ヨ公共の政を爲さべし。曰く上院下院を設け、上院ハ公武一席、下院ハ廣く天下の人才御擧用と。

かくて小楠ハ已ヨ對外の議を定め、已ヨ萬國の形勢を審ヨし、已に內國政治の革新策を呈し。而して后又富國强兵、士道の三策を立て曰く、宜しく天下に學校を興すべし。宜しく鑛山を開くべし、宜しく船材を貯ふべし、宜しく通商を盛ヨすべし、宜しく農工を勵奬すべし。宜しく海外の制ヨ從て以て

練兵の法を修得すべしと。而して遂に來る先だちて其二甥を米國に遣いし、海軍兵學校に入學せしめたり。其內外百年の經綸早く已に胸中に整然たりしものあるや知るべきなり。」余輩い小楠が公武間の政議に參し、卓策秀圖を畫出し、途に盤根錯節を截り、暗夜に光明を放照し。諤々堂々、大に國家の爲めに盡したる跡を陳べざるべし、蓋し是れ日も足ざれバなり。然ども彼の小楠が堯舜を學び來り、終に天体自然の聖胸を自得し、竊かに天下を以て自ら任じ、爵祿に迷いず、小譽に落ちず、時の愈々急なるを視て而して始て動き出で、神を六合に飛ばせて萬國を測り。議を百年に馳せて國是を定め、虛憤空慨の士を制し、近眼無識の徒を戒し。獨り超然として群雄を拔き、太虛の人を以て自ら許したる如き氣節を觀るときは、即ち彼れが奇謀の新策も比して以て稱するに足らざるを覺ゆるなり。

先段にも陳べたるが如く小楠が嘗て春嶽公に奉りし詩に曰く

斯道在懷三十年、　向公一日始談天、
天行如此公看取、　雨雪風雷發自然。

又某に贈る詩に曰く

此道未聞一躍求、　不助不長自悠々、
即今鬢髮如斯綠、　修得同爲白首頭。

斯道とい何ぞ。曰く堯舜の道なり。孔子の道なり。否。堯舜の私道に非ず。孔子作爲の道に非ず。即天地の公道なり、宇內の眞道なり、無私の聖道なり、仁愛の至道なり。即ち余輩より之を

稱すれバ則ち所謂るデビニチーの道たるなり。ヒューマニチーの道たるなり。

曰く斯道在懷三十年、向公一日始談天、と其の之を藏むるや久しく、以て容易ゑ人ゑ語らざりしや知るべし。曰く此道不聞一躍求、不助不長自悠々、と以て其自得の域ゑ達せし迄ゑい幾多の工夫を積みしや知るべきなり。

大物が行藏修己の跡、自ら當ゑ此の如くあるべきか。之を聞く小楠一日岩倉公に會し、歸りて人ゑ語て曰く我れ公を敎へんと欲するや久し、然ども彼れ竟ゑ之を悟得すると能いざるを恐れて未だ果さずと。嗟呼目今廟堂の士、また能く斯道を悟得するものこれ果して幾人ぞ。

又之を聞く小楠を刺したるものゝ誤認の一ゝ小楠が外敎を信じたる由を聞きたるに因ると。然ども小楠ゝ決して外敎を信じたるゑあらぞ。寧ろ其米國ゑ在る二甥へ贈りたる書ゑ曰く

西洋列國利の一途に馳せ一切義理無之就てゝ二典三謨熊澤書彌信仰の段甚以致大慶候。富國强兵機械の事に至りてゝ誠ゑ驚き入りたる事業なり。唯此一途のみ取り用ゆべき事ゑて。道ゑ於ては堯舜孔子の道之外世界に無之云〻と

かくて小楠常ゑ人ゑ語て曰く予れ望むらくゝ日本の國使となり、海外ゑ到り大義公道を說き、以て宇內の戰爭を止めしめんと。是れ即ち小楠が何止富國何止强兵、布大義於四海而已と覺悟したるのゆえんなりとす。其れ維新の豪傑等ゝ

當時多くゝ皆殺氣を帶び、或ゝ朝鮮を屠り、或ゝ西洋を挫き我國權を兵馬の間ゟ輝かさんとを欲したるものゟ外ならざりし。然るゟ獨り小楠ゝ天境ゟ超脱し、堯舜の道を率て以て天下萬國を敎化し了せんと望みたるもろゝ如し。一は彼等を滅んさと欲し、一ゝ彼等を救ゝんと欲す。其趣の異なるところは即ち亦たその人物の異なるところなるか。

嗟呼余輩ゝ今や大ゟ時事ゟ感するところあり、茲に横井小楠を追想し、而して聊か我情を洩らせり。而して心緒縷〻尙ほ辨せんと欲するもの尠からず。然れども茲に一先づ結末を告げ、更ゟ復又辨ずるところあらんとす。蓋し今日の日本を觀るゟ血氣あるものゝ壯士となり、血氣なきものゝ姑息ゟ安じ、才あるものゝ策士となり、學識あるものゝ蝦蟆となり、朝ゟ吐哺の聖人なく、野ゟ渭濱の大物なく、堯舜孔子の大道ゝ空名となりて擯けられ、公明無私の政策は雲霧に入りて顯ゝれず、俗兒子〻利己跳〻、而して國家將ゟ愈〻多事ならんとす。是れ豈今日の大患ゟあらずや。予輩が横井小楠を追想すゝまた實ゟ止むを得ざるに出づるなり。

大塩平八郎

東洋の豪傑と西洋の豪傑とを對照するゟ、左の相違あるもの〻如し

東洋の豪傑ゝ多く聖賢の書を讀み、克己修養練達の道ゟ志し、或ゝ陽明の工夫を學び、或ゝ禪機の悟を尋ね、頗る自制の德ゟ富む、斯故ゟ何ことなく威あつて重く、弧を彎て發せざ

るの趣きあり、然れども其弊を云へば、寧ろ天眞を缺く、自然を缺く、而して到底修養の道に重きを負ふて、平然たらぬところ多きが如し。

西洋の豪傑とても自修（セルフカルチユアル）を爲さゞるにあらず、然れども其發するところを觀るに、天眞自然にして頗る愛すべきもの多し、ラサレの如き、カルマルクの如き而して當今英國の社會に雷鳴を轟しつゝあるジヨン、バルンスの如きもの是也

東洋の豪傑とても思ひ切て怒らざるにあらず、然ども其怒る間にも自ら淫（おのづか）せざらんことを勉むるの傾きあり、西洋の豪傑に至てゝ其發するや餘情を殘さず、怒るときゝ已れを忘れて怒り、喜ぶときゝ己れを忘れて喜ぶ、所謂る喜怒色に顯れずとは、東洋の豪傑が標語とするところあれども、西洋の豪傑に至りてゝ恰も赤子の如きもの多し、而して自制克己の痕鮮

余輩ゝ東洋の豪傑を貶するものにあらず、又敢て西洋の豪傑と賞するものにもあらず、何れも一長一短あるを云へるのみ、又强ち西洋東洋の別のかくあるものありとは云ふものにあらざ、唯だその大躰より少しく趣を異にするものあるを云ゝんとするのみ

大盥平八郎ゝ其の何れに屬すべきか、余れ思ふに大盥平八郎ゝ身ゝ東洋の豪傑なれども、寧ろ西洋の豪傑に類す、其激して怒るときゝゝ、前後左右を打ち忘れて、身ゝ己に傍若無人の境に在り、平八郎一日矢部駿河守と談じ、言論國事に及ぶ、平八郎即ち慷慨悲憤禁ずると能ゝざ、膳に在る金頭（かながしら）を喰

ひつゝありしが、之を裁する餘裕を得ず、憤怒と共に之を頭より齟齬せりと云ふ、彼れ又一日弓奉行近藤某の宴に會す、近藤いかねて大鹽を喜バざるものなり、此に於てか半バゝ彼を輕侮せんと欲し、半バゝ彼れが膽力を試みんと欲し鼈を魚藍に盛り、平八郎の前に出して曰く、子を煩いす、請ふ之を宰せよと、平八郎即ち小刀を抜き甲肉をも頭足をも辨せず、其儘之を寸斷し、直に之を鍋中に投じ片甲をも遺さず喫したりと云ふ、

或人曰く平八郎い狂人に類すと、然れ共保羅がエルサレムの階壇に立つの時ハックスが密室に叫ぶの時パトリックヘンリーが北米の空に動くの時、誰かその狂人に類せずと云ふものあらんや、余れ今日の人士を視るに、彼等い餘り智巧に失す、叫ぶべき時に會ふも、先後を顧みて得叫ばず、動くべき時に會ふも緩急を計りて得動かず、成敗を顧み、機變を覗ひ、而して赤誠を其間に消磨せしめつゝあるもの比々皆是れなり、吾人い暴虎憑河の擧を爲すことを勸むるものにあらず、然れども至誠の激するところい、往々人をして成敗を忘れしむるものあつて存す、吉田松陰が同志を率ひて、間部下總守を京都に斬らんと欲したるが如きい、暴擧に過ぎず、一人の間部を斬るとも何の益あらんや、成敗時機を計るときい、靜かに默して天下の大策を運らすに在るのみ、然れども彼れは義憤の餘り、前後を顧みるの餘暇なかりし、直に斬て天下に殉へんと欲するの至誠ありしのみ、又何ぞ咎むるを要んや、大盥平八郎が暴擧に於けるも、亦た此類なり、人い

曰く大塩い犬死したるなり、所謂る無謀の師を興したるものゝみ、木砲を放て鐵城ゑ向ふ、其敗れんや必せり、何ぞ兒戯ゑ類するの甚しきやと、其れ然るか然らざるか、是れ大塩の問ふところゑあらず、贍學ぐれゞ糧食い纍々として倉庫ゑ充ち、視下せゞ餓莩縱横道路に斃る、彼れを望み此れを眺めて、義憤燃へ、愛腸烹へ、乃ち去て家財を散じ、家具を賣り、悉く之を饑餓者に給し、直ゑ戟を持て天誅を兇暴者の上ゑ試む、是れ亦た至誠止むを得ざるの順序ゑして、成敗を其間ゑ挾むべきものゑあらざるなり、

若夫れ大塩平八郎をして、自由の天地ゑ生れしめなゞ、或いヲサンとなりて、萬國社會黨の牛耳を執り、大ゑ爲すところあらしむべし、若くい又カール、マルクとなり、以て文筆上の大感化を與ふるの地位ゑ立たしむべし、然れども當時の天地は之を許さざりし、腸裂けんと欲すれども、口云ふと能いず、氣燃ゆれども手足自由ならず、獨り悲しむ耳目ゑ觸るゝものい、貧民の餓斃、惡吏の横行、見ざんと欲して、見ざる能はず、聞かざらんと欲して聞かざる能いず、遂ゑ己を忘れて此の義憤義擧ゑ及ぶ、嗚呼豈其れ止むを得んや

新衣着得祝新年。　羹餅味濃易下咽。
忽思城中多菜色。　一身溫飽愧干天。

平八郎も亦た人なり、新年ゑ會ふて新衣を着し、羹餅を食ふて味濃なりと云ふ、此時ゑ當りてい、四方を拜し四海の太平を謠いんと欲したるべし、然れども忽ち城中の細民を思へば、坐して溫飽を私する能いず、嗟嘆天に愧づるの心切なら

さるを得ざりし

厭喧聊比獨醒人。　曳杖吟詩步水濱。
只恨長江虛滾々。　未曾一洗滿城塵。

平八郎ハ風物を愛したる人なり、神仙を慕ふたるの人なりし然れども一たび人情界（ヒューマニチイー）を思ひ來れば、則ち長江ヨ向ふて城塵を洗ハざるの恨ヨ堪へざりし、

嗟呼當今何ぞ思ひ切て、事を爲すものヨ乏しきや、硬骨の男子、忽ち軟化し去る、之を詰れば即ち曰く、機未だ熟せず、時猶早し、須らく時變を待つべきなりと、吾人ハ其見の老熟ヨ服す、然れども天下の事ハ必ずしも老熟的の計策ヨ由て成るものヨあらず、視よや大盪平八郎ハ事に敗れたり、然れども維新革命の大精神を鼓舞したるものハ彼れ豈平八郎の力ヨあらずや、吉田松蔭ハ疎狂に失して捕へられ、遂に一劍の下ヨ斬られたり、然れども後進を率勵したるものハ、松蔭ヨあらざるや、事は一時の成敗を以て論ずべからず、カル、マルクハ我事敗ると嗟嘆して死せり、然れども其死ハ即ち英國社會をして彼れに同情を表せしむるの因緣となれり、ラサレハ即ち失望して予れは政治（ポリチック）の事に倦み疲れたり、我業遂ヨ成るべきにあらずと咏嘆し、愚かにも一婦人の爲めヨ其身を殺ろせり、然れども社會黨の中興ハ其功を彼れの肩に歸するヨあらずや、余等ハ深謀遠慮、誠内ヨ滿ちて、威外ヨ發するの豪傑を愛す、而して暴虎憑河の士を愛せず、然れども至誠内に缺け、勇氣外ヨ乏しく、機ヨ由り變を覗ふて、小智細策を弄するの俗士を愛せざるなり、而して若夫れ撰ぶところ

を云ハしめなバ吾人ハ前後緩急を顧みて、因循事を爲す弱士よりハ寧ろ成敗利鈍を顧みず、思ひ切て其身を致すの誠士を愛す、予れ此ニ於てか、大塩平八郎ニ同情を表するや切なるを覺ふ

大鹽中齋の學を論ず（此は演説を佐藤平治君が筆記せられたるもの也）

諸君我輩か中齋先生の所謂大虛なる者に付て論せんと欲するハ蓋し自己の所見と符合する所あるを以てなり

堯之を舜に傳へ舜之を禹ニ傳へ禹湯文武周公孔子孟軻順次ニ之を繼承したるの學ハ即是れ王陽明等が祖述したる學ニして陽明の學ハ決して孔孟と別派の學ニ非るなり、故ニ陽明より感得したる中齋の大虛と稱するもの亦之れ堯舜ニ採りたる者なると明なり

蓋し後世陽明を誤りて儒教の別派と認め之を異端と稱し邪説と呼ぶニ至りたる者抑も亦其原因あり、孟子以後俗儒大ニ孔教の眞意を謬り其説く所皮相ニ流れ其論する所外見に走り支離滅裂又收拾す可らさるニ至れり、然るニ之と既例ニ回し之を死地ニ起したる者ハ有名なる朱子なり、陽明も始めハ熱心ニ朱子を排せしが、後ニ至り全く己れと朱子と全説たるを悟りたり、尤も入道の点に於て朱子ハ文學より入らんと欲し、陽明ハ抜本塞源、直ニ靈臺の修養ニ從事したるの差異ハありし

抑も學ニ二種あり一は高尚にして所謂六合ニ互り宇宙に磅礴するものニ合せしむるもの、而して小人孺子之を解せ

さるなり、故に猶ほ小判の迂を學んずして直に彼等に適する卑近なる教即小乘の道を傳ふ是其二なり、後世儒道の老婆心より第二の法を採りたるもの多きを以て終に高尚偉大なる上乘の士ん之に滿足する能んす俊才多く逃れて禪に隱れ而して孔子の眞道遂に振んざるに至りたり

中齋夙に此に見る所あり疾呼して曰く儒教ん宜く其眞髓を說かざる可らず區々たる末節に拘泥す可らす然らすんは世を誤り道を紊し上乘の士を孔門に容る能んさるへし然らん即所謂儒教の眞髓なる者ん抑も何そや曰く大虛是れなりと

中齋の大虛や陽明ん之を達命自洒落と云ひ孔子は之を无意无必無固无我と云ひ孟子ん之を浩然之氣と云ひ孔明ん

君子之行靜以修身非靜難成學と云ひ小楠ん此道不知一躍求不助不長自攸々と云ひ海舟ん平心と云ふ此れ皆一のみ人によりて之を說くの道を異にするのみ佐藤一齋亦中齋の說に敬服し大虛を以て儒の粹なりと稱せり然ども一齋ん其意固必我を拔く能はす之を以て憾となしたりと云ふ今や論歩を進め直に中齋の說に入らんと欲す世間陽明中齋等を批評する者を見るに徒に哲學的に批評的に之を論するものと其學博からす其才宏ならさるも自から之を感得して論するものとの二種あるか如し、今其何を可とし何を否とすべきやは措て問ハす、唯余ん聊平生中齋を味ふ所あり故に假りに己れの意見として之を說かん、已に學者的に非す其誤謬あるへきん固より期する所なり、諸君幸諒焉

堯舜の意を見るよ實に无意无必无固无我即無私なり其心や公明正大一點の私あるなし故に其天下を己れの子よ傳へんとするの私情勿りき苟くも天下を保つの人ならんか之を禪りて可なり若し人其人よ非すんい是れ已よ私あるなり堯舜よ禪り舜禹よ禪る吾人此を思ふ毎よ轉た惆悵よ堪へさる者あり堯舜已よ大虛なり宜なる哉今日尙聖君賢主とし、て仰視せらるゝや吾人か大虛よ擊れて怒らす小兒を恨む能いす此其無心よ出つるを以てなり一點の偏私なき堯舜の民豈に其君の過を恨むとを得んや此道是れ堯舜より周公孔子よ順次よ傳へたる者なり

然らい中齋如何よして之を感得したるか大盤常よ天地の奇なるを見草木の發生花實の開統宇宙の宏壯なるを見叫て曰く宇內よ命あり道ありと是れ豈に宛然たる基督信者の言よ非すや

宇內よ命あり智あり又一定の理あり而して宇內い大虛なり人たる者亦心常よ宇內よ通せさる可らす小楠始めて海舟と遇ふや一詩を送て曰く

帝生萬物靈　使之亮大工　所以意趣大　神飛六合中

海舟是れより小楠よ服し呼ふよ師を以てしたりと云ふ此一絕能く宇宙の大虛よして而かも其心の廣大无邊能く動き能く爲すとを表したる者よ非すや陳眉公又云へるとあり曰く以大虛爲體以利濟爲甲斯人也天乎、中齋評之曰、誠哉是言也、故利濟不出乎大虛、則管商之政也、大虛而无利濟則佛老之道也、と大虛い即无心なり而して萬物整々として皆其

處よ安し各利濟即活動す彼の花の開活水の流逝皆天工を爲しつゝあるなり人物亦此の如くあらさる可らす而して人此境に至らんか斯人也天乎若し夫れ利濟の士よして大虛を欠かんか是れ即管商の政よして王道に非す何となれゝ其行ふ所私意私情あるを以て自ら權謀術數よ流るへし而君子則不取之、又大虛よして利濟勿らんか是れ老のみ佛のみ死灰となり木石となり寂滅となり一切空となり毫も活動せさるへし如此大虛のみを唱へんか活動せす利濟のみよ流れんか權謀の人となる須く來て眞人物を見よ

舜在位天下皆安其堵、是れ事を爲すよ无心なるを以てなり武王伐紂而君子不咎之、是れ一意專心民の爲めよ圖り毫も己れの私利私慾を省みざりしよよる此れ儒道の眞髓なり人這般の眞味を感得せゝ百事皆活動し天下を横行し得へきなり故學陽明者、皆有實德、非學者、非道德家、聖と傑とを兼ねたる實際的人物なり、之を以て陽明の泐ゝ大に支那よ於て忌せさるゝ所なり蓋し死人活物を怪ひの類乎諸君吾人青年ゝ大よ此に注意せさる可らす人我を擇て議士となさんか其位よ在りて、可なり人我を撰まさるか亦可なり此等の事よ局屈せすして而て實力漸次よ進ひへし是れ蓋し理以て說く能ゝす口以て云ふ能ゝさる所宜く沈思默考陽明中齋を自得する所ありて可なり

小楠又嘗て詩あり曰く

此道在懷三十年　向公一日始談天
天工如此公看取　雨雪風雷發自然

此詩也即大虛の氣なり今空を見るゝ自然ゝ風雷震ひ起り雨雪降る而して佛の徒は曰く一切空なり故ゝ雨雪風雷皆空なりと此其人の爲め國の爲め大事業を爲す能ハすして陽明の徒獨り此等の事業を爲すゝ耐ふる所以なり海舟の所謂平心なる者亦大虛に外ならす海舟嘗て云るとあり曰く世人ハ皆云へり勝ハ西鄕木戸等ゝ與みし累代の厚恩を擔ひたる幕府を倒したり不忠悖逆其罪誅を容れすと然り世人我を不忠と云ふ可なり世人我を悖逆と云ふ亦可なり平心是れ實ゝ我師なり維新の當時若し夫平心私を捨てゝ深慮せハ必ずや其戰を爲す可らさるの時なるを知らん若し私あらんか必す戰ハさる可らさるの時なりと旨ある哉言也若し當時ゝ在り宇內の心を有し天地の大道ゝ依り宇內の大勢ゝ鑑み日本全國を省みて考慮するときハ蓋し思ひ半に過きん區々たる江戸些々たる幕府豈海舟の眼ゝ在らんや若し夫れ海舟ゝして一たひ戰を唱へんか幕府末運ゝ屬すと雖三百年來積勢の致す所箱根以東ハ又朝廷の有に非るへし況んや各地ゝ佐幕の諸候少からさりしゝ於てをや幕府此勢ゝ乘し法親王を擁して天下ゝ號令せんか再ひ南北朝時代の慘狀を免れざるべし然るゝ外ゝ在てハ英魯の釁を窺ふあり內ゝ在ては兄弟垣ゝ鬩く危ひ哉印度緬絢の轍を踏まさる者殆と稀れなり海舟是ゝ於て平心ゝ大勢の趨く所國運消長の關する所を慮り己の名譽と生命とを犧牲ゝ供して平和主義を採りたり、是吾人後進の學ふへき所ならすや嗚呼海舟ハ夫れ大虛ゝして利濟を

兼ねたる者歟

海舟の當時豈よ死生の念胸間に蟠まる有らんや大虚を心として進む者い毫も死生の念に拘束せらるゝとなし是れ大虚にい毫も私勿れいなり彼美たる花枝頭よ咲ふや姝雨妬風の襲ふなきを期せす汚泥塵芥よ蹂躙せらるゝなきを期せす花よして若し一点の私あらんか危險を怖れ周圍を憚り終に開く能はさるへし然るよ萬物い无心なり赤誠の發する所花瓣爛々人目を眩し芳芬馥郁天眞を曲けさる者花豈よ私あらんや友人松山高吉氏歌あり曰く、

あらしふく峰の紅葉ちるを厭ひ
色の限りをそめすやいある

彼紅葉は已よ散るゝよ垂んとするも色を蜀紅に染めて而して散るよ非すや中齋の叛を謀りたる亦此よ外ならす蓋し彼赤誠の發する所一死以て滿足したりしならん

昔者孔門の徒三千人六藝に通するもの七十人子貢の雄辨子路の勇剛而かも顏子よ如かざるい何そや回也如愚而して孔子の眞意を悟りたり活然大悟すと云ふ者何そ理よあらんや何そ語にあらんや自ら之を感得するよ在るのみ故よ釋子い之を一字不見と云ひ孔子い我欲無言と云ひ基督い有耳而聽者可聽焉と云ふ此皆默して悟らしめんとを欲するなり諸君幸よ海舟か小楠の一絶よ感し是よ師事した る所の眞味を玩索せよ這般の妙味い心耳を開くよ非すんい到底之を自得することを得ざるへし

終よ臨て一言せん我基督教い大虚利濟等い言を須たす加

之天眞ゑして天より聳ゆる如き者なり陽明中齋の徒若し此道を聞くことを得たりしならゝ必すや其門下ゑ趨りたるなるべし實ゑ此敎や絶高なり極美なり故ゑ單ゑ耳ありて聞ふる者は聞くへしと放任するに於てゝ多く惑ふ者を生すへし是れ決して基督の志ゑ非るなり又神學上の議論多岐ならんか茫漠として終ゑ不信者と[illegible]なる者あるゑ至らん是れ實ゑ今日の大患なり然ども此傳道を勉むるゑ方り其說く所徒らゑ細末ゑ走り支離滅裂ゑ至る時ゝ眞人物遂ゑ來らす傑出の士遂ゑ到らさるへし彼ヒユームの如きミルの如き前者は必す基督敎に大眞理あるへしと信し之を研究するも牧師小乘を談し、敎師誤魔化を說く而して彼れ遂ゑ要領を得す後者ゝ若し神か神學者の說く如き不都合の者ならんゑゝ余を地獄に遣ゝさゝ余ゝ直ゐ之ゑ赴くべしと叫ひ悲矣哉二人共ゑ活眼を開て天地の大道を感得する能はさりしゝ實ゑ憫然なる事ならすや

嗟今日ゝ實ゑ困難の時期なり若し世俗ゑ投せん爲めゑ小乘を說かゝ遂ゑミル、ヒユームを誤るの失に陷るへく若し直ゑ其眞義を說かんか蹉躓する者多かるへし、然ども基督敎の眞髓は無我無偏にあり基督の敎を說くや侃諤己ます而して泣き而して怒り老幼皆其友、賢愚皆同胞、恰も花の開凋の如く自然なり而て遂ゑ十字架上に我事了はれりと說き其働きるた所皆人の益となり國の爲めとなり萬世の手本となり遂ゑゝ復活の大眞理となれり君人ゝ固く其肉体の復活を信して疑ゝさる者而して其復活ゝ單ゑ肉体ゑ於

けるのみならず靈の復活ょ至てゝ千八百年後の今日尙活動するに非ずや

嗟基督の復活や如此大盤の復活は實ょ維新革命の先導者となりたり吾人も亦無心大虛ょして爲す所利濟死生を忘れて自然ょ進まんか始めて國家の爲め民衆の爲め盡すを得べきなり滿塲の青年諸君々々ゝ我日本國の元粹なり我日本國の隆替ゝ全く諸君の手ょ在り乞ふ宇內を通して靈活神動せょ而して我事を了ゝらしめょ萬世ょ復活するの大偉人となれよ

十九世紀の豫言者

フレデリック、ロベルトソン

一般に解するところよれば豫言者とは、神の默示により て未來の出來事を先言するものゝ謂ひなり。然れども聖書なる豫言者ゝ强ちかゝるものゝみを指すょ非ず、心胸燃ゆるが如き赤誠を以て神の眞理を顯彰し、當時の迷夢を攪破し、國家を滅亡ょり救わんとて、胸を槌て衢街ょ立ち、聲を揚て曠野に叫ぶところのもの、是れ亦た所謂豫言者たるなり

イザヤ、エレミヤヨハネの徒皆此類なり。故ょイザヤ書、エレミヤ書の如きものゝ必ずしもト筮者が未來の出來事を豫言したるが如きものゝみを載せず、近來の說ょよればイザヤ書エレミヤ書の如きゝ、彼等か說敎集ょ過ぎずと云ふ。然

則豫言者とハ必ずしも舊約時代ニ限れる人に非ず、又使徒時代ニ限れる人ニ非ず、今日も亦多くの豫言者あるべきなり、ピーチャルの如きもの、チャンニングの如きもの、而して今ここニ所謂るロベルトソンの如きものハ眞正の意味に於て正しく豫言者と稱して可なるものとそ

兎ハ云へここニ區別を要すべきハ純粹の敎師と豫言者との間なり。純粹の敎師若くハ牧師たるものハ專ら敎理を敎へ牧羊を事とし、平日ニ在て救魂敎導薫陶を司どるものを云ふなり。然れども、かの所謂る預言者と稱するものニ至りては然らず、主とするところハ國家の危急を見て起り、敎會の腐敗を見て立ち、斯くでハ前途覺束なし、汝等警せよ、汝等醒めよ、汝等ハ船檣に眠るものなり、汝等ハ火山の上に踏舞するものなり。洪水乍ち來らんとす。何ぞ用意せざる、狂瀾將に倒れんとす何ぞ備を爲さざるやと獨ニ出でゝ呼び野に出でて叫び、熱心燃ゆるが如くニ或ハ辨じ、或ハ筆し、或ハ國家の間ニ奔走するところの者なり。於此乎其豫言者と稱せられんも強ち不當の言に非ざるを見るべし。彼等ハ人の見ざるニ先たちて事を見るものなり。彼等は人の氣付かざる先て氣付くものなり、人ハ知らず、こゝを以て飲み食ひ躍り娶り嫁ぎなどして樂しめり、然れどもノアハ獨り叫んで急を告げ營々として造船ニ從事したり、神の怒將た來らんとして國家ハ累卵の急より急なり、然れども世人ハ知らず、相率ひてバアルニ跪き、歡呼して僞りの豫言者の後ニ從へり此時ニ當りてイザヤ出でたり是れ皆預言者の資格あるも

のとす、異邦ゝ在て之を云へばデモセニース、彼れ即ち預言者たるなり、人民ハ知らず國の將ゝ亡びんとするとを、こゝを以てアテンスの榮名ゝ已惚れ、ペリクリス、アルシビアデス等の產處に誇り天下を野蠻視して高ぶれり、於此乎デモセニースハ赤誠を雖し躍り出でたり。佐久間吉田横井の如きものハ亦た同じく預言者たるなり、幕府の因循、外夷の侵入、天下人心の變動を察して茲ゝ書策經綸し國礎を萬代ゝ定めんとを期したりき。然れども盲者ハ矇々、聾者ハ瞶々、而して畢ゝ猜忌百出、誤解紛起當路者ハ終に彼等を仇とし視たりき。大凡預言者たるものハ皆概ね此くの如きものなりとす。我等笛吹けども汝等躍らず、胸搥てども汝等悲しまずとハ是れ實ゝ預言者が常ゝ會ゝべきの運命なりとす、彼等ハ二十年若くは三十年四十年五十年百年の後を洞觀するものなり、而して一般の人民等ハ徒らゝ眼前咫尺の間ゝ彷徨するとす。其相容れざる固より正ゝ然りとす、噫エルサレムよゝ汝荒地となりて殘されんとすと、血泣の涙を流したるものハ預言者イエスなり、然れども誰か之を信せんや神を瀆すものなりとて十字架ゝつけたり。されば余れゝ告げよ、誰か預言者として人民ゝ歡迎せられたるものやある然而てフレデリッキロベルトソンハ預言者なりき而て豫言者の生涯を送れり。フレデリックロベルトソンは一千八百十六年二月三日英國ゝ生る、祖父ハ有名なるナポレヨン戰時の軍人なり、而して父も亦た士官なりき、此を以てロベルトソンも早くより其身を軍籍ゝ置かんとを決せり、然れ

ども其父ハ之を好まず、寧ろロベルトソンをして牧師若くハ教師たらしめんことを望みたりき、ロベルトソンハ躊躇したりき、而して躊躇しつゝ「オックスフォード」大學ニ入れり

ロベルトソンは祖父若くハ父の戰談を聞き居たりき、而して屢々童子の胸臆を跳らせ居りき、其早くより軍人たらんことを望みしや宜べなりとす、然れども彼れハ亦た頗る文字の嗜好(テイスト)を有し、たりき、こゝを以て遂に書を讀むニ從ふて惟へらく、國家の干城とハ必ずしも劍を舞ハし銃を肩ニするものゝみの謂ニあらず、將士何れニ在る豪傑何れニ在る、彼等ハ一時の危きを救ひ、頂火の難を禦ぎたるニ過ぎず、國家の消長ハ國民の元氣ニ在り永遠の干城ハ人心の奮興ニ在り吾人ハ物質的武器軍艦を造ると同時ニ無形的の武器軍艦を人心の間に造らざるべからず、然則牧師たり教師たるハ是れ亦た一考せざるべからざるものなりと、於此乎慚く父の志ニ從ハんと欲するの傾向を有し來り、遂ニ友人の勸め並ニ種々の境遇よりして遂々教師たるニ決せり

ロベルトソンハ其初め至て天眞ニして單純なる信仰を有し居たりき、彼れ父ニ從ふて銃獵ニ出でたり、而して其父が一鳥を撃つ毎ニ常に心の中ニ祈て曰く願くハ神ニ父をして今此鳥を撃たしめよと而して其熱心の度が父をして其狙を誤ふしむるや否やニ付て大關係を有するものたりと確信したりき、ロベルトソンの信仰ハ其初め概ね皆此の如きものなりし。然るに漸々と成長するニ及んで彼れが信仰は複雜ニ移り來り、疑問百出、四顧矇々殆ど死陰の谷に迷ひ

入りたり。彼れい從來の神學ゑ服從し童子の信仰ゑ安心し單純ゑ教師たらんと欲するの志を起したりき。然れども「エテを讀みカアライルを讀みエモルソンを讀み、チャンニングを讀み其他當時の思想を讀むゑ從ひて大ゑ疑惑するところあり亦た大ゑ感發するところあり。於此乎己が爲めゑ一生の活路を見出さんと欲し乃ち苦悶の谷ゑ陷りぬ。彼れ一日二人の信者の祈禱するを見しゑ此者共いづれも手ゑ祈禱文を持ち居りしが半ば祈りては雜談を交へ雜談を交へてい又祈り、かくて戯れの如くして終ゑ祈禱を唱へ了れり。ロベルトソンい之を見て奮慨止まず、惟へらく嗟呼宗教い畢に死形ゑ陷りたるぞ、今ゑして之を救いまんば人心遂ゑ危かるべしと、彼れ行て神學者と論ぜ、皆答て曰荷くも從來の神學ゑ服せざるものい異端邪說の徒のみ魔鬼の從者のみ、と而て聽くゑ堪へざる率强附會の妄誕を主張す、彼れ心を痛めて惟へらく嗟呼今ゑして活眼達識以て基督教の神髓を講ずるゑあらずんば、斯道や終ゑ文明の後へゑ葬られざるべからずと、於此乎諸氏百家の說を叩き、千歲不滅の信を覓め遂ゑ多年の間悶絕の淵に沈みたり。記憶せよ、何ぞ古今獨創的宗教家の其轍を同ふするの甚しきや、保羅を視よ、ルーテルを視よ、ウエスレーを視よ、シュライエルマヘルを視よ、トロストイを視よ、ピーチャルを視よ、其跡一也。蓋し獨創的の宗教家たらんゑい必ずや此大悶大苦を經過せざるべからざるものと見ゆ。非耶。

凡そ受動的輕信者の腦中にい沈痛の響きあるとなし、又か

の才子的樂天家の腦中より人生の苦悶なきものとす、然れども、トロストイ、シュラエルマヘル、ポーロ、ルーテル、等凡そ肅念誠意あるところのものゝ至りてゝ、皆孰れも同境遇を通過せざるべからざるものと見ゆ、而してフレデリッキ、ロベルトソンは亦た其中の一人なりし、然り、ロベルトソンゝ人生の問題よりついて一大悶絶(ストラングル)を始めたり、從來の神學より從いんか、根據なき葛藤を捉て高嶽を攀づるの心地せり、進んで純理界(レショナリスム)に投せんか、四面茫々たる沙原のみ、畢竟其生を保つ能はず、於此乎苦み、苦みへ悶へ、悶へ、究め究め、穿ち穿ちて而して遂に人生の大磐石に到着せり、人生の大磐石とゝ何ぞ、曰く善(グードネス)。是れなりとす、ロベルトソンゝ從來の神學より迷ひたりし、從來の有神論より惑ふたりし、從來の聖書論、基督論、宗派論より迷ひたりし、然れども迷ひ迷ひ惑ひ惑ひて后、而して遂に絶呼して曰く、莫遮(さもあらばあれ)、予れゝ遂に善の味方たらざると能いざるなり、予が信仰ゝ如何に崩れ、予が學説ゝ如何に變はるとするも予れは遂に善の味方たるより外能いざるなり善、善、善！、斯善たるや萬界に通じ、萬境に行われ、而して遂に善の善たるを失いず、苟も善を將て行かば蠻貊の邦と雖ども、通せざるはなし、苟も善を行ふて通らば天下孰人か非議するものあらんや、畢竟するとおろ、今日宗教界の弊たるものゝ、口にて平和を説き、仁愛を説き、慈悲を説くと雖ども心誠に善を好みし、之を其身の一大主義となさゝる上に在り、神なくんば神なくもよし、神學妄ならば、妄なるもよし、唯だそれ予れゝ善の味方として一生我身を犧牲に供せん、嗟

呼予れ今こゝに立てり、即ち善の上に立てり、此磐石や千古万古畢に動かすべからざるものとす、宗派如何に分れば分れよ、德育如何に分れば分れよ、學說如何に分れよ、莫遮汝が畢に予が此の善の一字を動かすこと能はざるべし予れは已に立脚の地を得たり、懷疑は畢に周圍を繞ふところの雲霧に過ぎず、予が歩已に確たり、予が脚はゝに在り、一生の目的は已に業に定まれり、即ち予れは一生を爲し善を述べ、善の爲めに動き、善の爲めに進み、善の爲めに我身を犧牲にして働くに在るのみ、是れ我道なり、眞理なり、生命なりと

嗚呼ロベルトソンが進む神學上の光明を得ると能はざる下り下りて、遂に善の一途に進し、漸々蹈み留りて、こゝに立脚の地を定め、大息をつきながら、周圍を眺めて闇黑の裡に、震へる聲を揚げながら、無理にも強く疾呼して、予れは畢に底無き穴に陥ちざるなり、予れは磐石の上に在るなりとて、慣れにも又勇ましく、人生に向て叫びたる究路の解脫を想ふ毎に、吾人は實に氣の毒に堪へざる心地す、然れども怪しむと勿れ、是れ實に偉大なる宗教家が屢々陥りしところのものに外ならざるなり、トロストイはこゝに陥りて、遂に義務の磐石に立ち、シュライエルマヘルはこゝに陥りて遂に愛の磐石に立ち、ルトテルはこゝに陥りて、而して信の磐石に立ち、この磐石よりして、遂に漸々と其獨創的の神學を築き立て始めしにあらずや、然則怪しむと勿れ、ロベルトソンがこゝに善の磐石に落ち來りて、而して茲に十九世紀の

謬言者たる獨創的神學を起し始めたるまとを、凡て獨創的の人物ハ必ず先づ根本的の穿索、根本的の改革より始む、デカルツが「予れ思ふ故ゑ予れ存在す」と謂ふより其哲學の土臺を築き始めたるが如し、かの自ら腹に落ちざるも某々の神學なり某々の學説なり、某々の經歷なりと、聞くより頓みゑ合點して、然らば予れも其の如く思ハん、然らば予れも其説に從ハんとて、譯も分らぬ、無暗ゑ人の學説を當てゑし、只々學者識者の味方たらんとを求めて、更に自己は何事をも合點せざる、自得せざる拜人者拜名家の如きハ、畢ゑ萍々たる浮草の類のみ、書を讀む毎ゑ其説を變へ大學者の聲言を聞く毎に胸を躍らせ、彼れゑ行き此に隨ひ、明日ハ彼方の岸ゑ就くものハ、憫然ビ云ふより外なし、

然らバ諸君ゑ、須く先づ根本的の改革を行ひ來れ、若夫れ根本的に己が信仰を改め來りて、誠ゑゞリスチアンたると能ハざんば、則ちクリスチアンたる勿れ、若夫れ根本的ゑ己が土臺を驗し來りて、誠ゑ空漠たるものならば、一脚をも其土臺ゑ置く勿れ、要するに、今日の基督信者ゑハ己が自身の信仰たるとを打忘れて、兎角ゑ人の事の如くゑ之を心得、異端であると云ハるれバ、びくく〳〵し、學者の説ゑあらずと云ハるれば閉口し、只々人の評をのみ、是れ窺ふ者多し、信仰豈人の論評ゑ關せんや、若夫れ學者の説ゑのみ從んと欲せバ、學者ゑも種々の説あるなり、人の評ハ區々なり、吾人ハ其れ將た何れゑ從ふべきや、嗚呼此人已に我なきなり、亦た何ぞ談ずるゑ足らんや、然らバ則ち大膽なれ、大膽なると同時ゑ誠意

あれ、誠意あると同時ゝ肅念あれよ、然而して若夫れ誠に肅念あらば、則ち必ずや自己立脚の地ゝ戻り來りて、茲ゝ眞面目苦悶の眉を閉ぢ、而して始めて獨創的自得の信仰を得べきものとす、吾人不肖固より其人ゝあらずと雖も曾て信ずる吾人ハ吾人の帝王なりと、威武も屈する能ハざ、貧賤も移す能ハず、天下の衆庶も我に向ふて力なきものハ唯だ我が一心の信仰ゝ在りと、是れ獨立心の伏すと、ところ、是れ自重心の藏まるところ、是れなくんば我れなきあり、我れなきハ生命なきなり、空物のみ、然而して吾も亦た一たび實ゝ此の苦悶の淵ゝ沈みたりき、吾れ曾て大能至愛の神を認め居たりき三位一体を明解し居たりき、聖書の默示を信じ居たりき、然るゝ俄然として風出で雲起り、而して我れハ凡て此等のものを見失ひぬ、大能至愛？、若夫れ誠ゝ大能至愛ならば、何故ゝ此世ハかくも悲慘なるや、ロベルトソンハ其妹を失ふて殆ど神の至愛を疑ひ、ウオールズウオースは其弟を失て嗚呼天地の大原因ハ畢に我より愛あらざるかと叫びたり、何ぞ、此世の悲慘なるや、三位一体、是れ畢竟牽強附會の神學ゝ過ぎず、其の能く之を理解し得たりとするものハ、徒らに神學者の說を丸呑するものゝのみ、聖書の默示？、何ぞ其中ゝ誤謬あるやと斯くて予ハ殆ど怪霧の裡ゝ閉ぢ込められたり然れども其遂に下り下りて愈々危險の境に來りしとき、神ゝ謝す、予れ遂ゝ天地の間ゝ眞善眞愛の赫灼として燦くものあるを認めたり、而して我心の裏ゝ一片耿々たる至情あり、て、正ゝ此の天地の眞善美愛と相映じ、相連り、相引て、而し

て離るべからざる一物あるを發見せり、予れ此に於てか、即ち曰く嗚呼神學ハ如何にあれ、疑問は如何にあれ、予れハ遂に此の眞善美愛を離るべからざる一物なりとす、世に至愛の神なからんか、予れハ即ち神たらん、基督の性行傳記果して僞造僞物なるか、予れハ即ち基督たらん、聖書の默示果して之れ疑ふべきか、然則予れハ眞善美愛の默示を吐かん、之を要するに、吾人ハ眞善美愛の具体物たらざるべからぜ、神何故に尊きか、眞善美愛の總合物たりとするが故にあらぜや、基督何故に尊きか、是れ亦た眞善美愛の具体者たるが故にあらずや、然則畢竟するところ吾人は此の眞善美愛の味方たり、戀慕者たり、行爲者たり、運動者たり、犧牲者たりて止みなば其れにて足れり、而して此物や照々天に輝き、地に光り、人に生き、萬物に溢れて、而して決して見失ふことなきものとす、神學を待て始て之を知るべきにあらぜ、學說を聞て始て無理に服すべきものにあらず、實に見ざらんと欲して見ざる能ハず、聞かざらんと欲して聞かざる能はず信せざらんと欲して信せざる能ハざる明著眞確の眞理なりとす予れは之を好まざる能ハず、予れハ之を愛せざる能ハず、予れハ之を樂しまざる能ハず、嗚呼予れ將た誰れに行かんや永生を有てるものハ即ち此眞善美愛なるかなと、於此乎始て人生立脚の地を定め、此くて天地を一瞥するに、樂天の思想滿目に映じ來り、生々の意氣滿胸に躍り出で、六合燦爛、乾坤豁如として、神、基督、聖靈の顯れ出で默示の聲を天地萬聲の間に鳴り渡らせ玉ふものあるを見たりぬ、予れハ神學に

於て其意見なきあらず、然れども是れぞ之れ寔に予が苦悶の結果として踏み留りたるの磐石なりし、予れい淺學寡聞、固より足らざるものあり、然れども唯だそれ予等は予等の支配者として而して信仰い他人の附奪し能はざるものなるを知るを以て、竊かに彼の無我の拜人者にい優る所ろあらんと信ぜるものなり、今やロベルトソンの傳記を讀み其落ち來りたる立脚の地を尋ぬるに當り、自ら亦た身の經歷したるところを述ぶる、斯くの如し、思ふに讀者も亦た必ずや此の苦悶の境遇を通じ、而して茲に立脚の地を求めたるとあるや必せり、聞かまほし

次にロベルトソンに就て聞くところい、彼れが所說の廣きとなり、彼れの得意の說に曰、凡そ神の外、天下に絕對的の善

あるなく、絕對的の惡あるなし、惡と稱するものゝ中に多少の善事あらざるはなし、誤謬と稱するものゝ中に多少の眞理あらぬはなし、吾人は深く此事を心得ざるべからず、さらば天主教とても一概に擯斥すべきものにあらず、其信者の說なるとも大に考ふべきものあつて存す、凡そ宗派の爭ひなるもの、世上の議論なるものの何れより起る、多くい皆一方のみを見るより起る、全面よりして之を觀れば、兒戲に類するもの比々皆然り、吾人い眼孔を大になさざるべからぜ、彼我の議論を商量し、以て公平なる判斷を下さざるべからず於此乎其神學に於ける說も至て廣きものとなれり。今日に於てい斯說殆ど普通なるを以て、敢て新しきものとは思いねども、當時に在りていい人の愕くと大方ならず、皆罵て曰く

ロベルトソンハ天主教を賛成したり、ユニテリアンよりも同情と表すと傳ふ、而て未信者の説よすら幾らの眞理ありと宣言せりとぞ、何たる曖昧の信者ぞや、凡そ宗派を主張するゆえんのものハ、之を眞理なりと信ぜるが爲めなり、己よ之を眞理と信ず、乃ち之よ反するところの教理若くハ組織ハ即ち非眞理なりと謂ハさるを得ぜ、已よ非眞理なりとし、誤謬なりとなし、而して尚ほ能く之を賛し得るか、之よ同情を表し得るか、吾人が宗派よ忠信なるゆゑんのものハ、即ち眞理よ忠信なるゆゑんなり、ロベルトソンの如きものは、畢竟其執るところ堅からざるものなり、一言よて評すれバ眞理に忠信ならざるものなり、而して八方美人を學ぶものなりと、ロベルトソンハ勇氣ある人なりし、然れども又神經質の人なりし、惟ふよ此等の議論ハ輕々たる小輩の爲すとまろ顧みずして可なり、彼等の要求するところの、ものハ、眞理よ忠なれよと云ふよあるなり、而してロベルトソン氏ハ即ち眞理よ忠ならんが爲めに其説を廣くするものなり、彼等の所謂る眞理なるものハ、一宗派若くハ一組織に跼蹐するものなり、然れども、ロベルトソン氏の所謂る眞理なるものハ天地宇内の間よ通するものなり、固より同日の論よあらず彼等ハ異宗派と聞き、異教徒と聞かば、直よ以て非眞理の徒となし、誤謬者と爲し、而して一抹其中ゟ存する眞理をも罵倒し去り尚ほも加ふるよ咀呪を以す、然れども、ロベルトソン氏の如きものよりして、之を觀れハ、啻よ笑ふべきの至りなるのみならず、彼れ宗派者よそ、實よ往々非眞理の徒を以

て充滿す、彼等ハ己か目ニある梁木をのみ眞理となし、而して一切人の說を排斥す、こゝを以て進步なし、悔悟なし、而して頑迷移らず、自ら以て得たりとなし、火焰を吐て人の自由を妨害し、己れと違ふものを十字架ニ釘て快なりとなし、誠ニ神ニ忠なりと信ず、言語同斷限りなし、此等の小輩は顧みずして可なり、然ども ロベルトソンは百事を氣ニかくるの人なりし、惡く評せバ少く神經質の人なりし、善く評せば、正直なる人なりし、橫着ならぬ人なりし、此を以て大ニ此等の批評を苦慮したり、而して常に彼等の爲めニ憫憐の涙を流し居たりぬ。一日人ありて語て曰く、足下ハ百方の宗派ニ同情を表するが故ニ定めて百方より同情を得べしと。斯時ロベルトソン氏ハ驚然席を正して語つて曰く、オヽ君ニ、是れ皆な人の稱するところ、我は八方美人を學ぶが故ニ、定めて人々は愛嬌を得べしと云ふ、我れ誠ニ汝ニ告げん、我れ若し眞ニ同情を欲せバ、我れハ最も頑固なる宗派心の人なるを要す、蓋し宗派心の强き人は其宗派の中にて尊ばれ愛せられ崇められ同情を表せらるゝものなり、然れども百方に同情を表するものハ、畢ニ八方より棄てられざるを得ず、我れ若し眞ニ同情を欲せば、我れハ直ニ去て宗派界ニ投ずべし然れども只それ天地の大眞理を棄てゝ、而して頑迷固執の宗派界に投ずること能ハず、之れを以て畢ニ無同情の境遇ニ孤立せざるを得ざるなりと。

於此乎ロベルトソンハ基督の孤獨(ロンリーネス)を說き始めたり、ロベルトソンハ所謂る十九世紀の豫言者なり、彼れハ神學が如何

よ變化し行くかを先知し居たりし、教會が如何よ改革せられ行くかを豫知し居たりし、宗派が如何なる運命に出で會ふべきか、哲學が如何よ進歩し行くかを前知し居たりし、此を以て叫んで曰く、汝等ゝ空の景色を別つことを知りて、時の休徴を別ち能ゝざるか、視よ今や宗教界の思想ゝ將よ一大變動を來さんとす、汝等ゝ之を觀ること能はざるか、考究と批評と進化の大勢ゝ百物を襲ふて遺さゝらんとす、汝の立つところの地を驗し來れ、或ゝ沙上に立たざるか、或は檣上よ眠らざるか、危哉殆乎たりと。然れども世人ゝ悟らず、彼を目して妄りに新説を唱ふるものとなし、更よ同情を與へざりし。一日ロベルトソン天資優邁なる一少年を評して曰く、嗚呼可憐なる哉、彼れ一生不幸なるべしと、蓋し滔々たる俗輩より畢よ同情を得ること難きを云へるなり。トロストイ伯一日憮然として嘆じて曰く、アヽ予れゝ無智なる迷信家たらんことを冀ふと、蓋し智益々進めば、疑問益々興り、安心立命の地を得ること益々容易ならざるを以てなり。ロベルトソンゝ前よ懐疑の苦悶よ沈みて、トルストイと同感の情を起すことありし、而して今や天資優邁よして、人の悟らさるところを悟り、人の解せざるところを解し、百事を前知するの見識あるを以て、却て世上よ同情を得ること能ゝず、到るところ攻擊の衝よ當りしかば、則ち又此少年を憐れみしなり。然れども ロベルトソンゝ遂よ基督に思ひ到りて悟て曰く嗚呼是れ總て預言者の運命なるべし、イザヤ、エレミヤ、皆然らざるはなし、殊に基督ゝ明かよ其弟子達よ語て曰く、予れ尚ほ語

るべきと多くありと雖ども汝等い今之を悟ると能いずと夫れ其率ゆるところの弟子達すら、己よ其意を悟ると能いず、況や其の他の人よ於てをや、宜べなり、其税吏と交り給ふを見てい、乃ち罪人の友なりと思ひ、其人民よ同情を表し玉ふを見てい、乃ち飲食に耽るものゝ如りと云ひ、出でゝ奇蹟を行ひ玉ふを見ては、乃ちベルゼブルの徒と云ひしとや、左らば予れ亦何をか嘆かん、基督は即ち我摸範なり、基督い即ち我先驅者なりと。於此乎又小輩區々の説を顧みを、大膽よ兀立して預言者の聲を轟かしぬ。

斯くロベルトソンい周圍に敵を受くるのみにて更らよ友情の人を得ざりしも遂よ基督の生涯よ想ひ到りて、大よ奬勵せらるゝとまろあり、以爲らく凡そ豫言者の生涯なるものは皆概ね此くの如しと、此よ於てか、屹然立て大膽に己が滿胸の氣焔を吐き居りしが、こゝよ一種聖高なる快樂慰籍を氏に與ふるもの、出て來れり、何ぞや、即ち彼れが天地自然を樂しむ心是れなり、氏い元來詩人的の人なりし、然れども神學の疑問、人生の問題等よ、早くより其思想を奪い、天地を樂むの詩境よ遊ぶと能いざりしが、今や基督の孤獨を味ひ來り、變り易き墓なき人の毀譽褒貶を心に留めぬ樣なりしかば、乃ち詩魂勃如として興り來り、これより一層天地の間よ其友情を求め、無限の快樂と慰籍とを六合の中より伴ひ來るとゝいなりぬ。

ロベルトソン氏い尤もウオールヅウオースを賞嘆(アドマイアル)したり寧ろウオールヅウオースよ心醉したりと稱せられたるほど

なりき。彼れがウォールヅウオースに題する演說の如きい即ち彼れが演說中最も有名なる、ものなり、彼れい勞働社會に向ふて、詩情を養ふべき必要を說けり、人間中最も不風流なる勞働社會に向ふて詩情養成の必要と說く洵に迂遠なるが如しと雖ども、而かもロベルトソンの說に從へば、極めて然らず、夫れ勞働社會い食ふとあろ、衣るところ、住ふところを以て、己のが快樂を得ると能はず、まゝを以て天地の間に其快樂を求むると必要なり、凡て物各々主あり、一毫と雖ども取ると能はず、然れども、唯々山間の明月と江上の清風とい之を取れども禁ずるとなく、之を用ひて竭きず、是れ造物主の無盡藏なり之を取れ之を味へ、人生の快樂い此處に在るなりと叫びたり人或い云はん、是れ無益の業なり、勞働社會竟に詩情を味ふと能ざるべしと然れども、ロベルトソンい曰く然らず、花を觀て美を感じ、月を看て情躍る、是れ小兒の爲すところ、大人何ぞまゝに到ると能いざらんや、少しく心して養いゞ直に其の人たるに至らん、加之詩なるものい曾に天地自然を探ずるのみに止まらず、實に人生の實況を畫て、之に同情を表するものなり、勞働社會は謂へらく、天地に我を憐れむものなし、風い膚を裂き雨い窓を破り、日は熱く、月い悲しく、而して萬物皆予れを逆待すと、然ども思を此に飜へして、彼方光面の一方を觀よ、萬物決して敵ならざるなり、風い熱を拂ひ、雨い暑を滅し、日い温に、月い憐れむ、是れ皆汝の友にあらずや、加之凡そ詩人たるものい、此等のものをして皆汝の友たらしむるのみならず、最も善く汝に同

情を表し、汝が苦勞を思ひやり、汝が生況を憫察し、常に汝の味方たらんことを冀ふものなり、彼れに接せよ、汝の友にて在るなり、彼を讀め、汝の慰籍にて在るなり、云々とい是れロベルトソンが最も稱道したるところとす、彼れ自ら詩境に遊んで、獨り慰籍を得たるのみならず、其の之れを味ふの深きや、遂に勞働社會までをも勸めて、之に加入せしめんことを試みたり、嗚呼今や俗魂上を掠め、下禽獸に墮つ、此の時に當てロベルトソンたるものゝ誰ぞ。

ロベルトソンは次に專ら勞働社會の爲めに働を始めたり頃しもチャーレス、キングスレー、アデソン、モリス等が基督教社會主義を唱道する時なりける、ロベルトソンも決して彼等と共に事を爲さゝりし、然ども最も同情を表したりし

當時英國にゐる所謂「リフォーム、ビル」の大問題起り、「チャチスト」の大運動始まり、一葦海を隔つる佛國に於ても、第二の大革命を來さんとして人心恟々、貴族の壓制其頂點に達して平民糞土の如くに取り扱はるゝときなりし、ロベルトソンも社會黨を贊成せざりき、又キングスレー等と聊か其の意見を異にしたりき、然れども「我が隣とは誰ぞや」と云へる題目を掲げ來りて、こゝに「善きサマリタン」の説教を述べ社會的基督教を主張したる点に於ても、彼等と其精神を同ふしたりき、於此乎、直に勞働人會を起し、自ら之が會長となり、其死に至まで、忠信に之を教導訓諭したりき、或人ロベルトソンを詰て曰く、子も佛國の如き愚民的の革命を好むかと、ロベルトソン即ち儼然容を端して曰く、唯だそれ好まず、是故に

最も下民に同情を表するとを敢てするなり、世人は思いん下民に同情を表す、是れ貴族に敵するなりと、極めて然らず予れい貴族を愛護せんと欲するが故に、乃ち貴族を戒しむるなり、富豪家貴族等い或い思いん、抑壓以て下民に臨む、是れ下民を鎮治するの道なりと、極めて然らず視に若も今に して吾人の如き神の使者たるものが、誠に受隣的の福音を述へ、下民の爲めに其情を訴ふるところあらずんば、貴族富豪の上に如何なる災害を、及ぼすとあるや知るべからず、殷鑑指示に在り、之を觀ると能いざるが、予が下民の爲めに盡す所以のものい、即ち王族貴族の爲めに盡す所以なりと、今日に至りて之を視れば、固より至當の言なりと雖ども、當時勞働社會の爲めに盡せるロベルトソンの言行い非常に世上の物議を惹き起し、全く亂を挑むもの、猥りに異論を好むものとして退けらるゝに至らしめたり、吁々、

最も痛ましきい、彼れが常に病身なりしと是れなり、彼れ一日聖書を讀み、保羅が「我肉体に刺あり」、予れ之を三度主に取り去り給いんとを祈れり」とあるところを閲みし來るや、即滂然として落涙せしが、涙痕滴たり聖書を濡すに至りしとかや、嗟吁勇者も病を得ればカなく、辯者も聲嗄すれば用るところなし。斯くてロベルトソンい終に一千八百五十三年三十七歳を一期として早逝し去れり、彼れが運動の中心點たりしブライトンい、勞働者、學者、市民を擧げて泣かしめたり、彼れの敵も遂に驚讃し始めたり、而て今日い世界の東端に在る吾人をしてすら、裝を褰げて、また其後へに從いんと

欲するの、精神學氣を發起せしむ、嗚呼豫言者ハ常ニ後世ニ至て、其墓を建てらる、ロベルトソンの如きものハ、蚤生すと雖ども萬世に生るものと謂ふべきなり。

明治二十八年二月二十日印刷
仝　二月廿四日發行

定價十二錢
郵稅二錢

著者　松村介石
發行者　東京々橋區出雲町一番地　福永文之助
印刷者　仝麹町區十丁目四番地　佐久間金三郎
發行所　仝京橋區新橋出雲町一番地　警醒社書店
仝　仝神田區表神保町六番地　好明館
賣捌　大坂西區土佐堀三丁目　福音社
仝　横濱吉田町二丁目三十四番地　福音舍

版權所有

廣告

○地理學考	內村鑑三著	定價廿五錢	郵稅六錢
○新英語學	內村達三郎編	仝 五十錢	仝 六錢
日本國民之教育	渡瀨常吉著	仝 十五錢	仝 無料

立志美談	天福堂主人編	定價三十錢	郵稅四錢
●三版 アブラハム倫古龍傳	松村介石著	仝 廿五錢	仝
○コロムブス傳	內村鑑三著	仝 十六錢	仝 四錢
○ワシントン傳	漠北生著	仝 八錢	仝 無料
○五版 立志之礎	松村介石著	仝 廿五錢	
再版 婦人のかゞみ	松村介石著	仝	郵稅四錢
讃美歌手引	戶川安宅著	定價 六錢	郵稅二錢

幼稚園唱歌　ハウ女史著　定價三十錢　郵稅六錢
吾家の歴史　聽天居士編　全　三十錢　全　六錢
東洋大戰史　中島旭川編　全　十五錢　全　無料

鳥留好語　不知庵主人譯　定價廿五錢　郵稅無料
眞如の月　松居松葉著　全　十二錢　全
愛の杯　佐藤てつ譯　全　三錢　全　二錢
印度物語　大島正次譯　全　七錢　全　一錢
ありふれ物語　同　全　十二錢　全
祝ひ歌　若松賤子譯　全　十錢　全　二錢
世を渡るたつの風琴　香雨女史譯　全　十五錢　全　二錢
世界周遊記　ギユリキ著　全　二十錢　全　四錢

再版　基督傳記　竹越與三郎著　定價貳拾錢　郵稅四錢

來世論　デビス著　全　三十錢　全　四錢
有神論　全　十錢　全　二錢
羅馬書略解　全　十錢　全　二錢
福音對觀　全　六十錢　全十四錢
福音史　全一圓廿錢　全十八錢
神性論　全　三十錢　全　六錢
人性論　全　四十錢　全　六錢
二法一元論　ドラムモンド著　全　二十錢　全　無料
眞理一斑　植村正久著　全　三十錢　全
我邦の基督教問題　横井時雄著　全二十八錢　全　四錢
デビニヂー　松村介石著　全　十五錢　全　無料
大觀　平岡希久著　全　八錢
基督教新論　横井時雄著　全　十五錢
基督教解疑篇　平岡希久著　全　三十錢

求安錄　内村鑑三著　全二十五錢　全四錢
傳道の精神　内村鑑三著　全十五錢　全二錢
論評一班　星野光多著　全六錢　全二錢
眞教要論　小谷部善輔著　全十錢　全無料
使徒行傳問題　故山崎爲德著　全七錢　全二錢
天地大原因論　横井時雄著　全十五錢
羅馬教會論　全十八錢　全四錢

日本の道德ト基督教　原田助　横井時雄合著　定價八錢　郵稅二錢
基督教及社會　醫醒社書店編輯　全十五錢　全無料
仝　池本吉次編　全廿五錢　全
仝及哲學　同　全十五錢　全
仝及佛教　内村達三郎著　全八錢　全
基督教と條約改正　櫻井成明譯　全一四錢　全
基督教及儒教本分論

基督教と國家　小崎弘道著　全六錢　全二錢
宗教上の革新　横井時雄著　全六錢　全二錢
政教新論　小崎弘道著　全十八錢
宗教哲學　ラッド著　全十二錢　全二錢
佛道大意　水野功著　全十二錢　全二錢

思想の林　星野光多著　定價四十錢　郵稅六錢
談林　同　全五十錢　全八錢
大家說教集　三上松尾合譯　全三十錢　全六錢
道の菜。天路　戸川殘花譯　全十錢
函嶺講話　全廿五錢　全六錢
須磨講演　佐々倉代七郎編　全五錢　全二錢
新島高談集　デホレズト著　全十五錢　全四錢
精神的講話

レビット演說　平野濱著　全六錢　全二錢

安息日學校教へ方　古川道人著　定價三錢　郵稅二錢

眞理易知　ローズ氏著　全十五錢　全四錢

信仰の事實　平野濱著　全十二錢　全二錢

眞理摘要　白雲山人著　全八錢　全二錢

智惠の泉　田村直臣著　全四錢　全一錢

幼年の針路　全二十錢　全四錢

基督傳問題　全二十錢　全四錢

聖書史記問答　全十錢　全二錢

安息日學校讀本一、二、三、四、　本間重慶著　全五十錢　全十錢

日曜學校職員心得　ケリー本間合著　全八錢　全二錢

聖語一覽　星野光多著　定價三十錢　郵稅六錢

信徒のなぐさめ　內村鑑三著　全二十錢　全四錢

信仰の道　松村介石著　全七錢　全二錢

信仰の理由　小崎弘道著　全十五錢　全二錢

三綱領　金森通倫著　全六錢　全二錢

信仰問答　松村介石著　全三錢　全十錢

救の門　村田勤著　全三錢　全二錢

聖靈のバプテスマ　バックストン著　全五錢　全二錢

眞道指針　波多野培根著　全六錢　全二錢

基督教一班　小林光茂著　全十錢　全二錢

聖書衍義　村上俊吉譯　定價十五錢　郵稅四錢

千誠眞論　デホレスト著　全三十錢　全六錢

四福音註釋　村田直臣著　全一圓六十錢

新約全書註釋　ラーチット著　全九圓七十五錢

携帶新約全書註釋　辻密太郎著　全　五十錢　全　八錢

聖書辭典　ヘボン著　全一圓二十錢　全二十錢

聖書辭典　田村直臣著　全一圓廿五錢　全十八錢

創世記註（二冊上卷）　高橋五郎著　全　四十錢　全　無料

詩篇註釋　上　アッキンソン著　全三十五錢　全　六錢

全　上　瀬川淺著　全　十五錢　全　四錢

教會政治摘要　池本吉次著　定價十五錢　郵稅三錢

古代教會史　全　二十錢　全　四錢

教會歷史　ラーチット著　全一圓廿錢　全二十錢

東京市京橋區出雲町一番地　警醒社書店

52

71
282

004611-000-3

71-282

人物論

松村　介石／著

M28

ACE-1212